國學院大學学術情報リポジトリ

國學院大學図書館蔵　室町時代後期写『金葉和歌集』の解題と翻刻

メタデータ	言語: Japanese
	出版者:
	公開日: 2024-07-03
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 畠山, 大二郎
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.57529/0002000635

國學院大學図書館蔵 室町時代後期写『金葉和歌集』の解題と翻刻

畠山 大二郎

はじめに

本学図書館には、現在三本の『金葉和歌集』が所蔵されており、[1] 前号では伝為家筆清輔本（以下、清輔本）、前々号では、伝楠木正虎筆本（以下楠木本）の解題と翻刻を掲載した。本稿では、残る一本の室町時代後期写『金葉和歌集』の本文について翻刻し、その本文の特徴を明らかにしたい。

【書誌】

列帖装一帖。紺色表紙、縦二二・八糎、横一五・六糎。題簽「金葉和歌集」、縦一二・八糎、横三・二糎、雲紙に鳥と秋野か波のような絵が描かれている。見返しには金銀砂子を撒く。遊紙前後に各一丁。一面ほぼ一一行書き（一八丁ウのみ一〇行書き）。和歌は基本的に一行書き。詞書は二字下げ。

箱は桐箱（近年）。箱書き、極札、奥書なし。一丁オに「青渓書屋」の蔵書印がある。蔵書印主は、大島雅太郎で、

雅号は景雅。古典籍の収集家であり、『大島本源氏物語』の由来となった人物として有名である。[2] 虫損補修によって文字の判別が難しい箇所もある。

國學院大學図書館蔵室町時代後期写『金葉和歌集』の本文

國學院大學図書館蔵室町時代後期写（以下、室町本）は、藤原顕季の「うちなびき」の歌から始まっており、二度本系統に属する。國學院大學図書館に所蔵される『金葉和歌集』は、三本ともに二度本系統ということになる。『金葉和歌集』の伝本系統については、前々号にてまとめたが、二度本諸本の分類は所収歌数によってなされるという。[3] 所収歌数のみを見れば、楠木本は六八〇首、清輔本は六七三首、室町本は六八〇首となっており、楠木本・室町本が同数、先行研究でいうところの二度本第三系統に属することになる。つまり、精撰本に向かって、楠木本・室町本、清輔本の順となる。しかし、針本正行氏[4]は、所収歌数のみによる分類ではなく、校異や歌の配列順序の重要性を指摘された。『金葉和歌集』は、所収歌数だけではなく、歌の配列順序も諸本によって個性があり、写本ごとに異なる作品世界があるのである。

所収歌数をみると、室町本と楠木本が近接した関係のように思われる。どちらも写本上部に付箋が貼られている[5]など、関係が深いことは明らかであるものの、そう単純ではないようである。

歌の配列順序を、國學院大學図書館蔵の三本と新大系本との四本で比較し、特に順序が写本間で異なっている歌を以下に掲げる。

①室町本と清輔本とが一致するもの

内大臣「ちらぬまは花を友にて過ぬへし春より後のしる人も哉」（室町本）

室町本　…　五〇番歌　「山桜」歌の後　　新大系本　…　三九番歌　「この春は」歌の後

楠木本　…　四〇番歌　「この春は」歌の後　　清輔本　…　五〇番歌　「山桜」歌の後

他には、室町本九五番歌　源俊頼朝臣「かへる春卯月のいみにさしこめてしはしみあれのほとまてもみむ」の二例がある。

②室町本と新大系本とが一致するもの

よみ人知らず「こりつむるなけきをいかにせよとてか君にあふこの一すちもなき」（室町本）

室町本　…　五〇八番歌　「み熊野の」歌の後　　新大系本　…　四九四番歌　「み熊野の」歌の後

楠木本　…　五〇三番歌　「笠取の」歌の後　　清輔本　…　五〇三番歌　「笠取の」歌の後

他にはなく、一例のみ。

③新大系本と楠木本とが一致するもの

大中臣公長朝臣「をのゝえは木本にてや朽なまし春をかきらぬ桜なりせは」（室町本）

室町本　…　五三番歌　「吉野山」歌の後　　新大系本　…　四八番歌　「桜花」歌の後

楠木本　…　四九番歌　「桜花」歌の後　　清輔本　…　五一番歌　「散らぬ間は」歌の後

他にはなく、一例のみ。

④室町本だけが異なり、他は一致するもの

平康貞女「いそなつむ入江の浪の立かへり君みるまての命ともかな」（室町本）

室町本　…　五六五番歌　「家の風」歌の後　　新大系本　…　五五一番歌　「大江山」歌の後

楠木本　…　五五九番歌　「大江山」歌の後　　清輔本　…　五五八番歌　「大江山」歌の後

他には、室町本五六二番歌　修理大夫顕季「うたゝねの夢なかりせは別にしむかしの人を又見ましやは」、室町本六七七番歌　連歌　律師慶運「むめの花かさきたるみのむし」、室町本六七九番歌　連歌　永源法師「田にはむ駒はくろにそありける」の四例。

室町本を基準にして、歌の配列順序が異なる箇所を確認できた範囲で載せたが、④の用例がもっとも多いようである。それだけ室町本の歌の配列順序が独特のものであり、『金葉和歌集』の本文系統がいかに複雑であるかを示している。

また、室町本五三四番歌、源定信「みる人はよしのゝ山のさくら花をりしらぬ身や谷の埋木」の初句は、諸本「みな人」としており、独自異文である。こうした室町本独自異文は、和歌本文だけでも四〇例以上になる。誤写と思われる箇所もあるが、詠者名の校異も一〇例ほどみられる。こられをすべて誤写と考えることは難しいであろう[6]。

そのように考えていくと、室町本は歌の配列順序や校異のあり方が諸本とは異なっており、特徴的である。関係が近いと思われる楠木本と比較しても、本文がほぼ一致しているとは言い難い。『金葉和歌集』は、写本の一本一本がかように個性的であって、所収歌数のみで判断できるものではない。室町本・楠木本は、二本を比較することで従来の諸本研究のあり方を見直す好資料になるものと思われる。

註

（1）『二十一代集』所収のものなどをのぞく。

（2）角田文衞氏「大島本源氏物語の由来」（『大島本源氏物語　別冊』角川書店　一九九七年）参照。

（3）松田武夫氏『金葉集の研究』（パルトス社　一九五六年）、平澤五郎氏『金葉和歌集の研究』（笠間書院　一九七六年）、正宗敦夫氏『金葉和歌集講義』（自治日報社　一九六八年）。

（4）「清輔本金葉和謌集」（大学院開設六十周年記念『國學院大學貴重書影印叢書　第一巻』朝倉書店　二〇一三年二月）。

（5）室町本、楠木本ともに一五箇所の付箋があるが、その位置は必ずしも一致しない。とはいえ、全く違っているわけでもなく、目的も未だ不明である。なお、楠木本の小さな赤紙貼付の位置とも一致しない。

（6）例えば、諸本が「橘俊宗女（あるいは俊家女）」（新大系本四五八番歌）としている詠者名を、室町本は「前太政大臣家安藝」とする。また、室町本四八〇番歌「をとにきく」（『小倉百人一首』に採択）の詠者を、「一条紀伊」としている。諸本「一宮紀伊」で、祐子内親王家紀伊の別称であり、「一条紀伊」は誤写かと思われる。しかし、室町本一九八番歌、四九四番歌も一貫して「一条紀伊」の詠としていることから、誤写ではなく書写者の意思で「一条紀伊」としているようである。

【翻刻】

金葉和歌集　室町時代後期写　貴３１９７

【凡例】

- 歌は基本的に一行書きであるが、誌面の都合上折り返して表記されている箇所がある。詞書に関しても、原本の改行そのままにしたが、折り返して表記されている箇所がある。
- 漢字は通行のものを用いたが、旧字体や俗字に近い場合は、原本の表記にしたがった。
- 「〇」は補入記号を示す。
- 〈　〉内は翻刻者注を示す。
- 「※」は付箋を示す。
- （　）内の数字は歌番号を示す。
- 丁数及び表裏は、」〈1丁オ〉として丁の最後に示した。
- 囲み文字は、文字を消した後、その上から書いていることを示す。

〈白紙〉

青渓書屋の蔵書印　　」〈1丁オ〉

金葉和歌集巻第一

春哥

堀河院御とき百首哥めしけるに春の立心をつかまつれる　　修理大夫顕季

うちなひき春はきにけり山河の岩まの氷今日やとくらん（1）　　春宮大夫公実

春たちて梢にきえぬしら雪はまたきにさける花かとそみる（2）　　藤原顕仲朝臣

いつしかと明ゆく空のかすめるは天の戸よりや春はたつらん（3）　　皇后宮肥後　　」〈1丁ウ〉

つらゝゐしほそ谷河のとけゆくは水上よりや春は立らん（4）

人にかはりてよめる　　前斎宮内侍

春のくるよのまの風のいかなれは今朝ふくにしも氷とくらん（5）

立春の心をよめる　大宰大貳長実

いつしかと春のしるしにたつ物は朝の原の霞成けり（6）

むつきのついたちに雪のふりける日つかはしける　修理大夫顕季

あら玉の年のはしめにふりしけははつ雪とこそいふへかりけれ（7）

返し　春宮大夫公実　」〈2丁オ〉

朝戸あけて春のこすゑの雪みれは初花ともやいふへかるらん（8）

実行卿家の哥合に霞の心をよめる　少將公教母

あさみとりかすめる空のけしきにやときはの山も春を知らん（9）

藤原顕輔朝臣

としことにかはらぬ物は春霞たつたの山の気しき成けり（10）

大宰大貳長実

あつさゆみ春のけしきに成にけりいるさの山に霞たなひく（11）

百首哥の中に鶯の心をよめる　修理大夫顕季

鶯のなくにつけてやまかねふく紀備の山人春を知るらん（12）　」〈2丁ウ〉

はしめてうくひすをきくといへる事をよめる　春宮大夫公実

けふよりや梅のたちえに鶯のこゑ里なるゝはしめなるらん（13）

む月の八日春の立けるにうくひすのなきけるをきゝて　藤原顕輔

けさやさは雪うちとけて鶯の宮こにいつるはしめなるらん（14）

暁聞鶯といへることをよめる　源雅兼朝臣

鶯の木つたふさまもゆかしきに今一こゑは明はてゝなけ（15）

皇后宮にて人〳〵哥つかうまつりけるに雨中鶯といへることをよめる　」〈3丁オ〉

源俊頼

春雨はふりしむれとも鶯の聲はしほれぬ物にそ有ける（16）

良暹法師しのひてものへまかりけるに

左大弁経頼か家の梅さかりにさけりけれ

は門にひねもすにたちくらしてゆふかたいひ

入侍ける　良暹法師

梅の花にほふあたりはよきてこそいそく道をは行へかりけれ（17）

梅花夜薫といへることをよめる

前大宰大貳長房

むめかえに風や吹らん春のよはおらぬ袖さへ匂ひぬる哉（18）

朱雀にて人〳〵まかりて閑庭梅花と　」〈3丁ウ〉

いふことをよめる　大納言経信

けふこゝに見にこさりせは梅の花ひとりや春のかせに散まし（19）

道雅卿家哥合梅花をよめる

藤原兼房

散かゝる影はみゆれと梅の花水に春こそうつらさりけれ（20）

梅花をよめる　源忠季

かきりありて散ははつとも梅の花かをは梢にのこせとそ思（21）

子日の心をよめる　大中臣公長

かすか野ゝ子日の松はひかてこそ神さひゆかん陰にかくれめ（22）

百首哥の中に子日の心をよめる

大蔵卿匡房　」〈4丁オ〉

※春霞たちかくせとも姫小松ひくまの野へに我はきにけり（23）

柳絲随風といふことを

院御製

かせふけは柳の糸のかたよりになひくにつけて過春かな（24）

百首哥の中に柳をよめる

春宮大夫公実

朝またき吹くる風にまかすれはかたよりしけり青柳の糸（25）

池岸柳をよめる

源雅兼朝臣

風ふけは浪のあやをる池水に糸引そふる岸の青柳

（26）
喚子鳥をよめる　前斎院尾張　」〈4丁ウ〉
糸鹿山くる人もなきゆふ暮に心ほそくもよふこ鳥かな
（27）
霞中帰鴈といへることをよめる
藤原成通朝臣
聲せすはいかてしらまし春霞へたつる空にかへるかりかね（28）
帰鴈をよめる　藤原経通
いまはとてこし路にかへる鴈かねは羽もたゆくやゆき（雪イ）かゝるらん（29）
花薫風といふ心をよみ侍ける
摂政左大臣
よし野山嶺の桜やさきぬらん麓の里に匂ふ春かせ
（30）
白河の花見御幸に
新院御製（鳥羽院）　」〈5丁オ〉
たつねつる我をや花も待つらん今そ盛に匂ましける
（31）
太政大臣　雅
しら河のなかれひさしきやとなれは花の匂ものとけかりけり（32）
人にかはりてよめる　大宰大貳長実
吹かせも花のあたりは心せよけふをはつねの春とやはみる（33）
待賢門院兵衛
萬代のためしとみゆる花の色をうつしとゝめよ白川の水（34）
源雅兼朝臣
としことに咲そふやとのさくら花猶ゆく末の春そゆかしき（35）
宇治前太政大臣京極家御幸に
よませたまへる　院御製　」〈5丁ウ〉
春霞たちかへるへき空そなき花の匂に心とまりて
（36）
遠山桜といふことをよめる
春宮大夫公実
しら雲とをちのたかねのみえつるは心まとはす桜なりけり（37）
松間桜花といへることをよめる
内大臣

春ことに松の緑にうつもれて風にしられぬ桜花かな（38）

左兵衛督実能

この春はのとかに匂へさくら花枝さしかはす松のしるしに（39）

新院御方にて花契遐年といへることを

つかうまつる　待賢門院中納言　」〈6丁オ〉

しら雲にまかふ桜の梢にてちとせの春を空にしる哉（40）

藤原顕輔朝臣

萬世にみるへき花の色なれとけふのにほひをいつか忘む（41）

終日尋花といへる心をよめる

源貞亮

しら雲にまかふさくらを尋ぬとてかゝらぬ山のなかりつる哉（42）

堀河院御時女房達を花山の花見せ

につかはしたりけるかかへりまいりて御前にて

哥つかうまつりけるにかはりてよませ給ける

堀河院御製

よそにては岩こす瀧とみゆる哉峯のさくらや盛なるらん（43）」〈6丁ウ〉

源師俊朝臣

けふ暮ぬあすもきてみん桜花心してふけ春の山かせ（44）

翫花といへることをよめる

大宰大貳長実

かゝみ山うつろふ花をみてしよりおも影にのみたゝぬ日そなき（45）

深山花を

摂政左大臣

嶺つゝきにほふさくらを知るへにてしらぬ山ちにかゝりぬる哉（46）

人〳〵に桜の哥十首よませ侍けるによめる

修理大夫顕季

さくら花さきぬるときはよしの山立ものこらぬ峯のしら雲（47）

宇治前太政大臣家哥合に桜をよめる　」〈7丁オ〉

皇后宮摂津

散つもる庭をそみましさくら花風よりさきに尋さりせは（48）

源俊頼

山桜さき初しより久かたの雲ゐにみゆる瀧のしら糸
（49）
花為春友といへる哥をよみ侍ける
内大臣
ちらぬまは花を友にて過ぬへし春より後のしる人も哉
（50）
遥見山花といへる事をよめる
大蔵卿匡房
泊瀬山雲ゐに花のさきぬれは天河なみ立かとそみる
（51）
藤原忠隆　　」〈7丁ウ〉
よし野山峯に浪よるしら雲と見ゆるは花の梢なりけり
（52）
山花留人といへることをよめる
大中臣公長朝臣
をのゝえは木本にてや朽なまし春をかきらぬ桜なりせ
は（53）
堀河院御とき女御殿の御かたの女房あ
また花みありきけるによめる
前斎院筑前乳母
春ことにあかぬ匂ひをさくら花いかなる風のおしまさ
るらん（54）
人にかはりてよめる
僧正行尊
よそにてはおしみにきつる花なれとおらてはえこそか
へらさりけれ（55）　　」〈8丁オ〉
後冷泉院御時皇后宮哥合にさくらを
よめる　　堀川右大臣
春雨にぬれてたつねん山桜雲のかへしの嵐もそふく
（56）
月前見花といふ心をよめる
大蔵卿匡房
月影に花みる夜はのうき雲は風のつらさにおとらさり
けり（57）
顕季卿の家にて桜の哥十首人〳〵によませ
侍けるによめる　大宰大貳長実
※春の日のゝとけき空にふる雪は風にみたるゝ花にそ
有ける（58）
水上落花といへることをよめる
源雅兼朝臣　　」〈8丁ウ〉
花さそふ嵐や峯にわたるらん桜なみよる谷河の水

（59）
落花満庭といへる哥をよめる
左兵衛督実能
今朝みれは夜はの嵐に散はてゝ庭こそ花の盛也けれ
（60）
堀川院御時中宮御かたにて風静花芳
といへることをつかうまつれる
源俊頼
梢には吹ともみえてさくら花かほるそかせのしるしなりける（61）
ちる花のこゝろをよめる
長実卿母
春ことにおなし桜の花なれはおしむ心もかはらさりけり（62）
」〈9丁オ〉
おつる花風にしたかふといへる心をよめる
右兵衛督伊通
うらやましいかにふけはか春かせの花を心にまかせそめけん（63）
水上の落花といへる心をよめる
大納言経信
水上に花やちるらん山かはのゐくひにいとゝかゝるしら浪（64）
藤原成通朝臣
水のおもに散積花をみるおりそはしめて風はうれしかりける（65）
落花散衣といへることをよめる
藤原永実
散かゝるけしきは雪のこゝちして花には袖のぬれぬなりけり（66）
」〈9丁ウ〉
堀河院御時花のちりたるをかきあつめて
おほきなる物のふたに山のかたにつませ給て
中宮の御方にたてまつらせ給へりけるを
宮御覧して哥よめと仰ことありけれはつかう
まつれり
御くしけ殿
さくら花雲かゝるまてかきつめてよしのゝ山とけふはみる哉（67）
花の庭に散つもりたるをみてよめる
郁芳門院安藝
庭の花もとの梢に吹かへせちらすのみやはこゝろなるへき（68）
夜思落花といへることをよめる
隆源法師
」〈10丁オ〉

衣ては〈ママ〉ひるはちりつむさくら花よるは心にかゝるなりけり（69）

春日野へまかりけるに山田つくるを見てよめる　　高階経成

桜さく山たをつくるしつのおはかへす〳〵や花をみるらん（70）

後冷泉院御時月のあかゝりける夜女房御ともにて南殿にわたらせ給たりけるに庭のはなかつちりておもしろかりけるを御覧して見しりたる人にみせはやと仰事ありて中宮の御方に下野あらんとてめしにつかはしたりけれはまいりたるを御らむしてあの花折てまいれと仰こと有けれはつかうまつりける

」〈10丁ウ〉

下野

長きよの月の光のなかりせは雲ゐの花をいかておらまし（71）

新院御方にて殘花薫風といへること

をよめる　　中納言雅定

散はてぬ花のありかをしらすれはいとひしかせそけふはうれしき（72）

ならに人〳〵百首歌よみけるにさわらひをよめる　　権僧正永縁

山さとは野へのさわらひもえ出るおりにのみこそ人は問けれ（73）

百首の哥の中にかきつはたをよめる　　修理大夫顕季

東路のかをやかぬまのかきつはた春をこめても咲にける哉（74）

」〈11丁オ〉

春田をよめる　　大納言経信

あらをたにほそ谷河をまかすれは引しめなわにもりつゝそ行（75）

苗代をよめる　　津守國基

鳴のゐるさはへのをたをうちかへしたねまきてけりしめはへてみゆ（76）

後冷泉院御時弘徽殿の女御哥合に

苗代をよめる　　藤原隆資

山さとの外面の小田の苗代に岩まの水をせかぬ日そなき（77）

家のやまふきを人〳〵あまたまうてきてあそひけるつゐてにおりけるをみてよめる

中納言雅定

我やとに又こむ人もみるはかり折なつくしそ山ふきの花（78）　」〈11丁ウ〉

水邊款冬　摂政左大臣

かきりありて散たにおしき山吹をいたくな折そゐての河なみ（79）

大宰大貳長実

春ふかみ神なひ河に影みえてうつろひにけりやまふきの花（80）

後冷泉院御時御哥合にやまふきの心をよめる　前大宰大貳長房

款冬に吹くる風も心あらは八重なからをはちらささらなん（81）

夕につゝしをみるといへる心をよめる　摂政家参川

入日さすゆふ紅の色はへて山したてらす岩つゝし哉（82）

院の北面にて橋上の藤花といへることを　」〈12丁オ〉

よめる　大夫典侍

色かえぬ松によそへて東路のときはのはしにかゝるふち浪（83）

藤花をよめる　藤原顕輔朝臣

むらさきの色のゆかりに藤の花かゝれる松もむつましき哉（84）

房の藤のさかりなるをみてよめる　律師増覚

くる人もなき我宿の藤花たれをまつとてさきかゝるらん（85）

紫藤蔵松といへることをよめる　良暹法師

松かせのをとせさりせはふち浪をなにゝかゝれる花としらまし（86）

二条関白家にて池邊藤花といへることを　」〈12丁ウ〉

よめる　大納言経信

池にひつ松のはひえに紫の浪おりかくる藤さきにけり（87）

百首哥の中に藤花をよめる　修理大夫顕季

すみよしの松にかゝれる藤花かせのたよりに浪やおるらん（88）

雨中藤花といへる事をよめる
神祇伯顕仲
ぬるゝさへうれしかりけり春雨に色ます藤の滴とおもへは（89）
隣家藤花といへることをよめる
内大臣家越後
あしかきのほかとはみれと藤の花匂ひは我をへたてさりけり（90）　」〈13丁オ〉
三月盡の心をよめる
大僧都證観
春のゆく路にきむかへ郭公かたらふこゑに立やとまると（91）
中納言雅定
殘なく暮行春をおしむとて心をさへも盡しつるかな（92）
三月尽〇日戀の心をよめる
内大臣
春はおし人はこよひとたのむれは思ひわつらふけふの暮哉（93）
重服に侍けるとし三月尽の日人のもと
よりをとつれて侍けれはつかはしける
藤原顕輔朝臣　」〈13丁ウ〉
おもひやれめくりあふへき春たにも立わかるゝはかなしき物を（94）
摂政左大臣家にて人〳〵三月尽の
心をよみ侍けるによめる
源俊頼朝臣
かへる春卯月のいみにさしこめてしはしみあれのほとまてもみむ（95）　」〈14丁オ〉
〈白紙〉　」〈14丁ウ〉
金葉和歌集巻第二
夏哥
卯月のついたちの日更衣の心をよめる
源師賢朝臣
我のみそいそきたゝれぬ夏衣ひとへに春をおしむ身なれは（96）
二条関白家にて人〳〵に餘花の心をよ
ませ侍けるによめる　藤原盛房
夏山の青葉ましりの遅桜はつ花よりもめつらしき哉

（97）
應徳元年四月三条内裏にて庭樹
結葉といへる哥よませたまひける　院御製　」〈15丁オ〉
をしなへて梢みとりに成ぬれは松のちとせもわかれさりけり（98）
大納言経信
玉かしは庭もはひろに成にけりこやゆふしてゝ神まつる比（99）
鳥羽殿にて人〳〵哥つかうまつりけるに
卯花の心をよめる　春宮大夫公実
雪の色をうはひてさける卯花にをのゝ里人冬こもりすな（100）
大蔵卿匡房
いつれをかわきておらまし山里のかさねつゝきにさけるうの花（101）
卯花をよめる　江侍従
雪としもまかひもはてすうの花は暮れは月の影かともみゆ（102）
摂政左大臣　」〈15丁ウ〉
卯花のさかぬかきねはなけれとも名になかれたる玉川の里（103）
うの花たれかかきそといへることをよめる
中納言実行
神山の麓にさけるうの花はたかしめゆひしかきねなるらん（104）
卯花をよめる　大納言経信
しつのめかあし火たくやも卯花のさきしかゝれはやつれさりけり（105）
鳥羽殿の哥合に郭公をよめる
修理大夫顕季
み山出てまたさとなれぬ郭公たひの空なるねをや鳴らん（106）
藤原節信
けふもまた尋くらしつ時鳥いかて聞へきはつ音なるらん（107）　」〈16丁オ〉
郭公の哥十首人〳〵によませ侍けるついてに
摂政左大臣
郭公すかたは水にたつれとも聲はうつらぬものにそ有ける（108）
源雅光

ほとゝきすなきつとかたる人つてのことのはさへそうれしかりける（109）

杜鵑尋ける日はきかてふつかはかりありてきゝけれはよめる　橘成元

時鳥をとはの山のふもとにて尋しこゑをこよひきくかな（110）

長実卿家哥合に郭公の心をよめる　左京大夫経忠

としことに聞とはすれとほとゝきす聲はふりせぬ物にそ有ける（111）　」〈16丁ウ〉

時鳥まつ心を　内大臣

恋すてふなき名やたゝむ郭公まつにねぬよの数しつもれは（112）　藤原顕輔朝臣

郭公心もそらにあくかれてよかれかちなるみ山邊のさと（113）

承暦二年内裏哥合に郭公を人にかはりてよめる　藤原孝善

ほとゝきすあかて過ぬる聲により跡なき空をなかめつるかな（114）

郭公をよめる　権僧正永縁

聞たひにめつらしけれは時鳥いつも初音の心ちこそすれ（115）

人〳〵十首哥〇よみけるによめる　源俊頼　」〈17丁オ〉

待かねて尋さりせはほとゝきす誰とか山のかひにきかまし（116）

時鳥夢をおとろかすといへることをよめる　中納言実行

おとろかす聲なかりせは郭公またうつゝにはきかすやあらまし（117）

時鳥をまつといへることをよませ給へる　院御製

ほとゝきすまつにかゝりて明す哉藤の花とや人はみるらん（118）

俊忠卿家哥合に郭公をよめる　二条関白家筑前

まつ人の宿をはしらて郭公をちの山邊をなきて過也（119）　中納言女王　」〈17丁ウ〉

郭公ほのめく聲をいつかたときゝまとはしつあけほ

のゝ空（120）

時鳥をよめる　前斎院七条

やとちかくしはしかたらふ郭公まつよのかすのつもるしるしに（121）

中納言雅定

ほとゝきす稀になく夜は山ひこのこたふるさへそうれしかりける（122）

宇治前太政大臣家哥合に郭公をよめる　康資王母 筑前イ

山ちかく浦こく舟はほとゝきすなく〈ママ〉渡こそとまり成けれ（123）

匡房卿美作守にてくたりけるとき路にて郭公のなくをきゝてよめる　中原高真

」〈18丁オ〉

きゝもわかすこきそわかるゝ時鳥我心なる舟出ならねは（124）

郭公をよめる　皇后宮式部

ほとゝきす雲のたえまにもる月の影ほのかにも鳴渡哉（125）

暁聞郭公といへる事をよめる　源定信

わきもこにあふさか山の郭公あくれはかへる空になく也（126）

尋郭公といへることをよめる　よみ人しらす

時鳥たつぬるたにもある物をまつ人いかて聲をきくらん（127）

雨中郭公といへることをよめる

」〈18丁ウ〉

大納言経信

ほとゝきす雲路〇（に）まよふこゑす也をやみたにせよ五月雨の空（128）

五月五日実能卿のもとにくすたまつかはすとて　内大臣

あやめ草ねたくも君かとはぬ哉けふは心にかゝれと思に（129）

永承四年殿上の根合にあやめをよめる　大納言経信

萬代にかはらぬ物は五月雨のしつくにかほるあやめ也けり（130）

郁芳門院根合にあやめをよめる　藤原孝善

あやめ草ひくてもたゆくなかきねのいかてあさかの沼

におふらん（131）　」〈19丁オ〉

承暦二年内裏哥合にあやめの心を
春宮大夫公実

玉江にやけふのあやめは引つらんみかける宿の露（つまイ）にみゆるは（132）

宮つかへしけるむすめのもとに五月五日薬玉
つかはすとてよめる　権僧正永縁母

あやめ草我身のうきを引かへてなへてならぬに生も出なん（133）〈「生も」の横に「思イ」と書いて消した跡がある〉

百首中にあやめをよめる
春宮大夫公実

菖蒲草よとのにおふる物なれはねなから人は引にやあるらん（134）

五月五日家にあやめふくをみてよめる
左近府生奏兼久　」〈19丁ウ〉

おなしくはとゝのへてふけあやめ草五月雨たへは〈ママ〉もりもこそすれ（135）

むかし中院にすませ給けるころは見えさりけるあやめを人の中院のと申けるを御覧
してよませ給ける
第三宮

あさましや見し故郷のあやめ草我しらぬまにおひにける哉（136）

百首中に五月雨の心をよめる
参議師頼

五月雨にぬまの岩かき水こえてまこもかるへきかたもしられす（137）

さみたれのこゝろをよめる
藤原定通　」〈20丁オ〉

さみたれは日数へにけり東屋のかやか軒はのしたくつるまて（138）

承暦二年内裏哥合に五月雨のこゝろをよめる
源道時朝臣

五月雨に玉江の水やまさるらん蘆の下葉のかくれゆく哉（139）

権中納言俊忠卿家の哥合に五月雨の心をよめる
藤原顕仲朝臣

さみたれに水まさるらしさはた河まきのつき橋うきぬはかりに（140）

五月雨の心をよめる

左兵衛督実能

五月雨はをたの水口てもかけて水の心にまかせてそみる（141）

三宮　　」〈20丁ウ〉

さみたれに入江の橋のうきぬれはおろす筏の心ちこそすれ（142）

摂政左大臣家にて夏月の心をよめる

神祇伯顕仲

夏のよの庭にふりしくしら雪は月の入こそきゆる成けれ（143）

権中納言俊忠卿の家の哥合に水鶏の心をよめる　藤原顕綱朝臣

里ことにたゝく水鶏のをとす也心のとまるやとやなからん（144）

摂政左大臣家にて水鶏の心をよめる

源雅光

夜もすからはかなくたゝく水鶏かなさせるともなき柴のかりやを（145）

実行卿家哥合に夏風の心をよめる　」〈21丁オ〉

修理大夫顕季

夏衣すそのゝ草を吹かせに思ひもあへすしかやなくらん（146）

水風晩涼といへる事をよめる

源俊頼朝臣

風ふけは蓮のうき葉に玉こえて涼しくなりぬ日くらしのこゑ（147）

照射の心をよめる　源仲正

澤水にほくしのかけのうつれるをふたともしとや鹿はみるらん（148）

神祇伯顕仲

鹿たゝぬは山のすそにともしして幾夜かひなきよを明すらん（149）

家哥合に花たちはなをよめる

中納言俊忠　　」〈21丁ウ〉

さ月やみ花橘のありかをはかせのつてにそ空にしりける（150）

百首哥中に花橘をよめる

春宮大夫公実

宿ことに花たち花そにほひける一本かすゑに風はふけとも（151）

二条関白家にて雨後夏草といへること

をよめる　源俊頼朝臣

この里はゆふ立しけりあさちふに露のすからぬ草のはもなし（152）

実行卿家哥合に鵜河の心をよめる　中納言雅定

大井河幾瀬う舟の過ぬらんほのかになりぬかゝり火のかけ（153）

夏の夜月をよめる　源親房

玉くしけふたかみ山の木のまより出れはあくる夏のよの月（154）

六月廿日ころに炁節になる日人のもとにつかはしける　摂政左大臣

みか月の〈ママ〉てる日の影はさしなからかせのみ秋のけしきなる哉（155）

公実卿家にて對水待月といへることをよめる　藤原基俊

夏の夜の月まつほとのてすさひに岩もるし水いく結しつ（156）

秋隔一日といへることをよめる　中納言顕隆

みそきする汀にかせの涼しきは一夜をこめて秋やきぬ（立イ）らん（157）

〈白紙〉

金葉和歌集巻第三

秋哥

百首哥中に秋立心をよめる　春宮大夫公実

とことはに吹ゆふ暮のかせなれと秋たつ日こそ涼しかりけれ（158）

野草節露といへることをよめる　大宰大貳長実

まくすはふあたのおほのゝしら露を吹なはらひそ秋の初かせ（159）

後冷泉院の御時皇后宮の哥合に七夕の心をよめる　土佐内侍

萬代に君そみるへき七夕のゆきあひの空を雲のうへにて（160）

七夕の心をよめる　能因法師

織女のこけの衣をいとはすは人なみ〳〵にかしもして

まし（161）

七月七日ちゝのふくにて侍ける年よめる

橘元任

藤ころもいみもやすると織女にかさぬにつけてぬるゝ袖哉（162）

七夕の心をよめる　前斎宮河内

恋〳〵て今夜はかりやたなはたの枕の塵のつもらさるらん（163）

三宮

天河わかれにむねのこかるれはかへさの舟はかちもとられす（164）

中納言國信

七夕にかせる衣の露けさにあかぬけしきを空に知る哉（165）

織女の後朝の心をよめる

内大臣

かきりありてわかるゝ時も七夕の涙の色はかはらさりけり（166）

皇后宮権大夫師時

織女のあかぬ別の涙にや花のかつらも露けかるらん（167）

内大臣家越後

天河かへさの舟に浪かけよのりわつらはゝほともふはかり（168）

源俊頼朝臣

かへるさはあさせもあらし天河あかぬ涙に水しまさらは（169）

草花告秋といへる事をよめる

源雅兼朝臣　」〈24丁ウ〉

さきそむるあしたの原の女郎花秋をしらする妻にそ有ける（170）

源縁法師

咲にけりくちなし色のをみなへしいはねとしるし秋のけしきは（171）

烋のはしめの心をよめる

大納言経信

をのつから秋はきにけり山里の葛はひかゝるまきのふせやは（172）

田家秋といへることをよめる

左兵衛督伊通

いなは吹かせのをとせぬ宿ならはなにゝつけてか秋をしらまし（173）

山家炁といへることをよめる
藤原行盛　」〈25丁オ〉

山ふかみとふ人もなき宿なれとそともの小田に秋はきにけり（174）

師賢朝臣の梅津の山里に人〳〵まかりて田家秋風といへることをよめる
大納言経信

ゆふされは門たのいなはをとつれてあしのまろやに秋風そ吹（175）

みか月の心をよめる　大江公資朝臣

山のはにあかて入ぬる夕月夜いつあり明にならんとすらむ（176）

摂政左大臣家にてゆふつくよの心をよめる
藤原忠隆

かせふけは枝やすからぬ木のまよりほのめく秋の夕月よかな（177）

月は旅の友といへることをよめる　」〈25丁ウ〉
法橋忠命

草枕このたひねにそ思しる月よりほかの友なかりけり（178）

閑月見といへることを
顕仲卿女

もろともに草葉の露のおきゐすはひとりやみまし秋のよの月（179）

明月を翫といへることをよめる
前中納言伊房

偽になりそしぬへき月影のこのみるはかり人にかたらは（180）

鳥羽殿にて旅の月といへる事をよめる
春宮大夫公実

我こそはあかしのせとに旅ねせめおなし水にもやとる月かな（181）　」〈26丁オ〉

寛治八年鳥羽殿にて翫池上月といへることをよませ給ける　院御製

池水にこよひの月をうつしもて心のまゝに我物とみる（182）

大納言経信

てる月の岩まの水にやとらすは玉ゐる数をいかてしらまし（183）

翫明月といへることをよめる
民部卿忠教

いつくにも今夜の月をみる人の心やおなし空にすむらん（184）

後冷泉院御時皇后宮哥合に駒迎の心をよめる　藤原隆経

ひく駒の数よりほかにみえつるは関のし水の影にそ有ける（185）」〈26丁ウ〉

駒迎の心をよめる　源仲正

東路をはるかしいつる望月のこまにやこよひあふ坂の関（186）

八月十五夜の心をよめる　源親房

さやけさは思なしかと月影をこよひとしらぬ人にとはゝや（187）

閏九月のあるとし八月十五夜によめる　春宮大夫公実

秋は猶のこりおほかるとしなれとこよひの月の名こそおしけれ（188）

水上月といへることをよめる　前斎院六条

雲のなみかゝらぬさ夜の月影を清瀧川にうつしてそみる（189）」〈27丁オ〉

九月十三夜閑見月といへることをよめる　源俊頼

すみのほる心や空にはらふらん雲のちりゐぬ秋のよの月（190）

月をよめる　皇后宮肥後

月をみておもふ心のまゝならはゆくゑもしらすあくかれなまし（191）

人のもとにまかりて物申けるほとに月の入けれはよめる　源師俊

いかにしてしからみかけん天河なかるゝ月やしはしよとむと（192）

経長卿かつらの山庄にてしつかに月をみるといふことをよめる　大納言経信

こよひわれかつらの里の月をみて思のこせることのなき哉（193）」〈27丁ウ〉

承暦二年内裏の哥合に月をよめる　春宮大夫公実

くもりなき影をとゝめは山のはに入とも月をおしまさらまし（194）

宇治前太政大臣家哥合に月をよめる　皇后宮摂津

てる月の光さえゆくやとなれは炑の水にもつらゝゐにけり（195）

源俊頼

山のはに雲のころもをぬきすてゝひとりも月の立のほる哉（196）

水上月　　摂政左大臣

あしねはひかつみもしけき沼水にわりなくやとるよはの月哉（197）

宇治前太政大臣家哥合に月のこゝろを

」〈28丁オ〉

よめる　　一条紀伊〈ママ〉

鏡山峯よりいつる月なれはくもる夜もなく影をこそみれ（198）

秋難波のかたにまかりて月のあかゝりけれ

はよめる　　参議師頼

いにしへのなにには〇（の）ことを思出てたかつの宮に月やすむらん（199）

炑月ひるのことしといへる事をよめる

藤原隆経

菊の上に露なかりせはいかにしてこよひの月をよるとしらまし（200）

翫月といへることをよめる

源行宗

名残なくよはの嵐に雲はれて心のまゝにすめる月かな（201）

」〈28丁ウ〉

平師季

三笠山ひかりをさして出しよりくもらてあけぬ秋のよの月（202）

宇治入道前太政大臣〇（家）三十講哥合に月の

心をよめる　　よみ人しらす

宿からそ月のひかりもまさりけるよのくもりなくすめはなりけり（203）

月をよめる　　藤原忠隆

※ながむれはふけゆくまゝに雲はれて空ものとかにすめる月哉（204）

奈良の花林院哥合に月をよめる

権僧正永縁

いかなれは秋は光のまさるらんおなしみかさの山のはの月（205）

藤原顕輔

」〈29丁オ〉

みかさ山もりくる月のきよけれは神の心もすみやしぬ

らん（206）

太皇太后宮扇合に月の心をよめる

大納言経信

かすか山峯より出る月かけはさほの河せのこほり成けり（207）

顕季卿の家にて九月十三夜に人〳〵月の哥よみけるによめる

大宰大貳長実

くまもなくかゝみとみゆる月影に心うつらぬ人はあらしな（208）

源俊頼

むら雲や月のくまをはのこふらん晴行たひにてりまさる哉（209）

月の心をよめる　藤原家綱　」〈29丁ウ〉

※いまよりは心ゆるさし月影にゆくゑもしらぬ人さそひけり（210）

月照古橋といへる心を

三宮

とたえして人もかよはぬたな橋は月はかりこそすみ渡けれ（211）

水上月をよめる　藤原実光

月かけのさすにまかせて行舟はあかしの浦やとまりなるらん（212）

題しらす　大宰大貳長実

さらぬたに玉にまかひて置露をいとゝみかける秋のよの月（213）

永承四年内裏歌合に月の心をよめる

藤原家経朝臣

よとゝもにくもらぬ空の上なれは思ふことなく月をこそみれ（214）　」〈30丁オ〉

月前旅宿といへることをよめる

修理大夫顕季

松かねに衣かたしき夜もすからなかむる月をいもみるらんか（215）

ひとり月をなかめてよめる

藤原有教母

なかむれはおほえぬこともなかりけり月や昔のかた見なるらん（216）

行路暁月といへることをよめる

権僧正永縁

もろともにいつとはなしに有明の月のみをくる山ちをそ行（217）

對山待月といへることをよめる
土御門右大臣　」〈30丁ウ〉
あり明の月まつほとのうたゝねは山のはのみそ夢にみえける（218）
山家暁月といへることをよめる
中納言顕隆
山さとの門田のいほの〳〵とあくるもしらす月をみる哉（219）
月あかゝりけるころあかしにまかりて月見て
のほりたりけるに宮この人〳〵月はいかゝと
尋たりけれはよめる
平忠盛朝臣
ありあけの月もあかしの浦かせになみはかりこそよると見えしか（220）
月前落葉といへることをよめる
源俊頼　」〈31丁オ〉
嵐をやはもりの神もたゝる覧月にもみちの手向しつれは（221）
むしをよめる　前斎院六条
露しけき野へにならひてきり〳〵す我手枕の下になく也（222）
はたをりといふ虫をよめる
顕仲卿女
さゝかにの糸ひきかくる草むらにはたをる虫のこゑそきこゆる（223）
鳫をよめる　よみ人しらす
玉つさはかけてきつれと鳫金のうはの空にもきこゆなる哉（224）
鳫のなく聲をきゝてよめる
春宮大夫公実
いもせ山峯の嵐やさむからん衣かりかね空になく也（225）　」〈31丁ウ〉
鹿をよめる　三宮大進
妻こふるしかそなくなるひとりねのとこの山風身にやしむらん（226）
暁鹿をきくといへることをよめる
皇后宮右衛門佐
おもふことあり明かたの月かけにあはれをそふるさほしかの声（227）
夜深聞鹿といふことをよめる
内大臣家越後

夜はになく聲に心そあくかるゝ我身は鹿のつまならねとも（228）

摂政左大臣家にて旅泊鹿といへること
をよめる　源雅光

さもこそは都こひしき旅ならめ鹿の草さへぬるゝ袖かな（229）　」〈32丁オ〉

鹿の哥とてよめる　藤原顕仲

世間をあきはてぬとやさをしかの今はあらしの山になくらん（230）

野花帯露といへることをよめる
皇后宮肥後

しら露と人はいへとも野へみれはをく花ことに色そかはれる（231）

太皇太后宮の扇合に人にかはりて萩
の心をよめる　僧正行尊

こ萩原にほふさかりはしら露も色〳〵にこそみえわたりけれ（232）

大宰大貳長実

しらすけのまのゝはき原露なからおりつる袖そ人なとかめそ（233）

女郎花をよめる　隆源法師　」〈32丁ウ〉

をみなへしさける野へにそやとりぬる花の名たてに成やしぬらん（234）

哥合し侍けるとき女郎花をよめる
中納言俊忠

ゆふ露の玉かつらして女郎花野原のかせにおれやふすらん（235）

女郎花をよめる　藤原顕輔

しら露や心をくらんをみなへし色めく野へに一夜ふす（かよふィ）とて（236）

摂政左大臣

女郎花よのまの風におれふしてけさしら露に心をかるな（237）

摂政左大臣家にてふちはかまをよめる
源忠季

さほ川のみきはにさける蘭なみのよりてやかけんとすらん（238）　」〈33丁オ〉

蘭をよめる　右兵衛督伊通

かりにくる人もきよとやふちはかま秋の野ことに鹿の立らん（239）

神祇伯顕仲

さゝかにのいとのとちめやあたならんほころひわたるふちはかま哉（240）

鳥羽殿の前栽合に女郎花の心をよめる

春宮大夫公実

あたしのゝ露吹みたる秋風になひきもあへぬをみなへし哉（241）

野草留人といへることをよめる

平忠盛

ゆく人をまねくか野への花薄こよひもこゝにたひねせよとや（242）

堀川院御時御前にてをの〳〵題をさくり

て哥つかうまつりけるに薄をとりてつかう

まつれる　源俊頼

鶉なくまのゝ入江の濱かせにおはななみよる秋のゆふ暮（243）

河霧をよめる　藤原基光

宇治河のかはせもみえぬ夕霧にまきのしま人舟よはふ也（244）

郁芳門院根合に菊をよめる

中納言通俊

」〈33丁ウ〉

さかりなる籬の菊を今朝みれはまた空さえぬ雪そ降ける（245）

鳥羽殿の前栽合に菊をよめる

修理大夫顕季

千年まて君かつむへき菊なれは露もあたにはをかしとそ思（246）

」〈34丁オ〉

摂政左大臣の家にて隣家紅葉といへる

ことをよめる　藤原仲実

もすのゐるはしのたちえのうす紅葉たれわかそのゝ物とみるらん（247）

承暦二年内裏の哥合に紅葉をよめる

源師賢朝臣

はゝ木ゝの梢やいつこおほつかなみなその原は紅葉しにけり（248）

宇治前太政大臣大井河にまかりたりける

ともにまかりて水邊紅葉といへることをよめる

大納言経信

大井河岩浪たかしいかたしよ岸の紅葉にあからめなせそ（249）

太皇太后宮の扇合に人にかはりて紅葉の

」〈34丁ウ〉

心をよめる　源俊頼

をと羽山紅葉ちるらしあふさかの関のをかはに錦をりかく（250）

落葉をよめる　藤原伊家

谷河にしからみかけよたつた姫峯のもみちに嵐ふく也（251）

大井河御幸につかうまつれる　修理大夫顕季

大井河ゐせきのをとのなかりせは紅葉をしける渡とやみん（252）

深山紅葉といへる事をよめる　大納言経信

山もりよをのゝ音たかくきこゆ也嶺の紅葉はよきてきらせよ（253）

紅葉をよめる　神祇伯顕仲　―〈35丁オ〉

よそに見し嶺の紅葉や散くるとふもとの里は嵐をそまつ（254）

大井河逍遥に水上落葉といへることをよめる　藤原伊家

はゝそ散岩まにかつく鴨鳥はをのか音羽も紅葉しにけり（255）

落葉埋橋といへる事をよめる　修理大夫顕季

小倉山峯のあらしの吹まゝに谷のかけはし紅葉しにけり（256）

落葉隠水といへることをよめる　大中臣公長

大井河ちる紅葉ゝにうつもれてとなせの瀧は音のみそする（257）

落葉随風といへることをよめる　―〈35丁ウ〉

長実卿母

※色ふかきは山かくれの紅葉ゝは嵐のかせのたよりにそみる（258）

九月尽の心をよめる　中原経則

あすよりはよもの山邊の秋きりのおも影にのみたゝんとすらん（259）

源師俊朝臣

草の葉にはかなくきゆる露（露やイ）をしも形見に置て秋の行らん（260）

九月尽日大井にまかりてよめる　春宮大夫公実

おしめとも四方の紅葉は散はてゝとなせそ炑の
とまりなりける（261）
」〈36丁オ〉

〈白紙〉　」〈36丁ウ〉

金葉和歌集巻第四
冬哥
承暦二年御前にて殿上のをのことも
探題て哥つかうまつりけるに時雨をとりて
源師賢朝臣
神無月しくるゝまゝにくらふ山したてるはかり紅葉し
にけり（262）
従二位藤原親子家の造子合に時雨をよ
める　修理大夫顕季
時雨つゝかつちる山のもみちはをいかに吹よの嵐なる
らん（263）
奈良の人〳〵百首の哥よみけるによめる
権僧正永縁　」〈37丁オ〉
山河の水はまさらて時雨には紅葉の色そふかく成ける
（264）
時雨をよめる　摂政家参河
神無月しくれの雨のふるたひに色〳〵になるすゝか山
かな（265）
後朱雀院御時御前にて紅葉を見といへる
心をよめる　前中納言資仲
紅葉ちる山は秋霧はれせねはたつたの川のなかれをそ
みる（266）
大井にまかりて落葉の心をよめる
平致親
大井河もみちをわくる筏士はさほに錦をかくるなりけ
り（267）
落葉の心をよめる　大納言経信
三室山もみち散らし旅人のすけのをかさに錦をりかく
（268）　」〈37丁ウ〉
竹風雨ににたりといへることをよめる
中納言基長
なよ竹の音にそ袖をかつきつるぬれぬにこそはかせと
知ぬれ（269）
神無月の十日ころにしかのなきけるをきゝて
よめる　法印光清
何ことに秋はてなからさをしかの思かへして妻をこふ

らん（270）

百首哥の中にもみちをよめる　源俊頼

たつた河しからみかけて神なひのみむろの山の紅葉をそみる（271）

網代をよめる　皇后宮肥後

氷魚のよる河せにみゆるあしろ木は立白浪のうへにやあるらん（272）　」〈38丁オ〉

月照網代といへることをよめる　大納言経信

月きよみ瀬ゝのあしろによるひほは玉もにさゆる氷成けり（273）

旅宿冬夜といへる事をよめる

たひねする夜床さえつゝ明ぬらしとはたそかれのこゑきこゆ也（274）

関路千鳥といへることをよめる　源兼昌

淡路嶋かよふちとりのなく聲にいく夜ねさめぬすまの関守（275）

藤原隆経朝臣

たかせ舟さほのをとにそしられけるあしまの氷ひとへしにけり（276）

谷水結氷といへることをよめる　」〈38丁ウ〉

内大臣

たにかはのよとみにむせふ氷こそみる人もなき鏡なりけれ（277）

百首哥の中にこほりをよめる　藤原仲実朝臣

しなかとりゐなのふし原風さえてこやの池水氷しにけり（278）

冬月をよめる　神祇伯顕仲

冬さむみ空にこほれる月かけはやとにもるこそとまり也けれ（279）

氷満池上といへることをよめる　大納言経信

水鳥のつらゝの枕ひまもなしむへ寒けらしとふのすかこも（280）

深山霰をよめる　大蔵卿匡房　」〈39丁オ〉

はしたかのしらふに色やまかふらんとかへる山にあられふる也（281）

水邊寒草といへることをよめる

大中臣公長

たかねには雪ふりぬらしましはかるほきのかけ草たるひすかれり（282）

宇治前太政大臣家哥合に雪の心をよめる　源頼縄〈ママ〉

衣てによこの浦かせさえ〳〵てこたかみ山は雪ふりにけり（283）

橋上初雪といへる事をよめる　前斎院尾張

しら浪のたちわたるかとみゆる哉はまなのはしにふれる初雪（284）

初雪をよめる　大納言経信　」〈39丁ウ〉

はつ雪はまきのはしろく降にけりこやをの山の冬のさひしさ（285）

雪中鷹狩の心をよめる　源道済

ぬれ〳〵も猶かりゆかむはしたかのうはけの雪をうちはらひつゝ（286）

鷹狩の心をよめる　源俊頼

はしたかをとりかふ澤にかけみれは我身もともにとやかへりけり（287）

内大臣家越後

ことはりやかた野ゝをのになく雉子さこそはかりの人はつらけれ（288）

百首哥の中に雪の心をよめる　大蔵卿匡房

いかにせんすゑの松山浪こさは峯のはつ雪きえもこそすれ（289）　」〈40丁オ〉

宇治の前太政大臣家哥合に雪の心をよめる　皇后宮摂津

ふる雪に枚のあを葉もうつもれてしるしもみえぬ三輪の山もと（290）

権中納言女王

岩代のむすへる松にふる雪は春もとけすやあらんとすらん（291）

大嘗會主基方備中國弥高山をよめる　藤原行盛

雪ふれはいやたか山の梢にはまた冬なから花さきにけり（292）

雪の哥とてよめる　源俊頼

ころもてのさえゆくまゝにしもとゆふかつらき山に雪はふりつゝ（293）

雪の御幸におそくまいりければはしきりに
」〈40丁ウ〉

おそきよしの御使たまはりてつかまつれる
六条右大臣

朝ことの鏡のかけにおもなれて雪みにとしもいそかれぬ哉（294）

炭かまをよめる　皇后宮権大夫師時

すみかまにたつ煙さへをの山は雪けの空とみゆる成けり（295）

百首哥の中に雪をよめる
隆源法師

都たに雪ふりぬれはしからきのまきのそま山あとたえぬらん（296）

皇后宮肥後

道もなくつもれる雪に跡たえて故郷いかにさひしかるらん（297）

選子内親王いつきにをはしましけるとき雪の
」〈41丁オ〉

ふりたりけるに月のあかゝりける夜まいりたりけれは女房ねたりけるにや月も見さりけれは

みすにむすひつけゝる哥
藤原兼房

かきくらし雨ふる夜はやいかならん月と雪とはかひなかりけり（298）

冬月をよめる　源雅光

※有乳山雪ふりつもるたかねよりさえてもいつる夜はの月かな（299）

家経か桂の山庄の障子の絵に神楽し
たるかたかきたる所をよめる
康資王母

榊はや立まふ袖のをひかせになひかぬ神はあらしとそ思（300）
」〈41丁ウ〉

神楽をよめる　皇后宮権大夫師時

神かきのみむろの山に霜ふれはゆふしてかけぬ榊はそなき（301）

氷をよませ給へる　三宮

つなかねとなかれもゆかすたかせ舟むすふ氷のとけぬ限は（302）

水鳥をよめる　前斎院六条

※なか〳〵に霜のうはきをかさねてやをしの毛衣さえまさるらん（303）

池氷をよめる　前斎宮内侍
浪枕いかにうきねをさたむらん氷ます田の池のをし鳥
（304）
修理大夫顕季
狭筵におもひこそやれさゝのはにさゆる霜よのをしの
ひとりね（305）
依花待春といへる心を　」〈42丁オ〉
内大臣
なにとなくとしのくるゝはおしけれと花のゆかりに春
をこそまて（306）
歳暮の心をよめる
藤原成通朝臣
人しれす暮行としをおしむまに春厭名の立ぬへきかな
（307）
霜月の十日ころに摂政左大臣の家にて
冬の題ともをさくりてよみ侍けるに歳
暮の心をよめる　中原仲実
かそふるに殘すくなき身にしあれはせめてもおしき年
の暮哉（308）
この哥よみて年のうちに身まかりにけるとそ
年の暮の心をよませ給ける　」〈42丁ウ〉
三宮
いかにせん暮ゆくとしをしるへにて身を尋つゝ老はき
にけり（309）
中原長國
年暮ぬとはかりこそはきかましか我身のうへにつもら
さりせは（310）
中納言國信
なにことを待とはなしに明くれてことしもけふに
なりにけるかな（311）
」〈43丁オ〉
〈白紙〉　」〈43丁ウ〉
金葉和歌集巻第五
賀部
長治二年三月五日内裏にて竹不
改色といへることをよませ給ける
堀河院御製
代〳〵ふれとおもかはりせぬかは竹はなかれてのちの
ためし也けり（312）
郁芳門院の根合に祝の心をよめる
六条右大臣

萬代はまかせたるへし石清水なかきなかれを君によそへて（313）

堀川院御時堀河院に遷御の時松契遐年といへることをよめる　」〈44丁オ〉

大納言俊実

水のおもに松のしつえのひちぬれはちとせは池の心なりけり（314）

禁中翫花といへることをよめる　中納言実行

九重に久しくにほへ八重桜のとけき春のかせとしらすや（315）

花契遐年といへる事をよめる　源師俊朝臣

萬世とさしてもいはし桜花かさらむ春しかきりなけれは（316）

橘俊綱か家の哥合に祝の心をよめる　藤原國行

をのつから我身さへこそいはゝるれたれか千世にもあはまほしさに（317）　」〈44丁ウ〉

百首哥の中に祝の心をよめる　源俊頼

君か代は松のうは葉にをく露のつもりてよもの海となるまて（318）

祝心をよめる　大納言経信

君か世のほとをはしらて住よしの松をひさしと思けるかな（319）

後一条院弘徽殿の女御の御哥合に祝の心をよめる　永成法師

きみか代はすゑの松山はる〳〵とこすしら浪の数もしられす（320）

嘉承二年三月鳥羽殿行幸に池上花といへることをよませ給ける　堀河院御製　」〈45丁オ〉

池水のそこさへにほふはな桜みるにもあかしちよのはるまて（321）

大嘗會主基方辰日参音聲に鼓山をよめる　藤原行盛

をとたかきつゝみの山のうちはえてたのしきみよになるそうれしき（322）

悠紀方の朝日の郷をよめる　藤原敦光朝臣

くもりなきとよのあかりにあふみなる朝日のさとそ光さしそふ（323）

巳日楽破に雄琴郷をよめる

松風のをことのさとにかよふにそおさまれるよのこゑはきこゆる（324）

後冷泉院御時大嘗會主基方備中國

二萬郷をよめる　藤原家経朝臣　」〈45丁ウ〉

御調物はこふよころをかそふれは二まの郷人数そひにけり（325）

おなし國のいなゐのさとを人にかはりてよめる

高階明頼

苗代の水はたなゐにまかせたり民やすけなる君か御世かな（326）

祝心をよめる　皇后宮肥後

いつとなく風ふく空にたつ塵の数もしられぬ君か御代哉（327）

花契遐年といへることをよめる

大宰大貳長実

花もみな君かちとせを待なれはいつれの春か色もかはらん（328）

摂政左大臣中將にて侍けるころ春日使にてくたり侍けるに周防内侍女使にて侍けるに　」〈46丁オ〉

為隆卿行事弁にて侍けるにつかはしける

周防内侍

いかはかり神もあはれと三笠山二葉の松のちよのけしきを（329）

たいしらす　藤原道経

君か代はいくよろつ世かかさぬへきいつぬき川の鶴の毛衣（330）

宇治前太政大臣家の哥合に祝の心をよめる

中納言通俊

君か代は天のこやねのみことよりいはひそめし久かれとは（331）

大蔵卿匡房

君か代はくもりもあらしみかさ山嶺に朝日のさゝむかきりは（332）

新院北面にて藤花久匂といへることをよめる　」〈46丁ウ〉

大夫典侍

藤なみは君かちとせの松にこそかけて久しくみるへか

りけれ（333）

祝の心をよめる　源忠季

君か代は冨の緒川の水すみてちとせをふともたえしとそ思（334）

実行卿家の哥合に祝の心をよめる

藤原為忠

みつかきの久しかるへき君か代を天照神やそらにしるらん（335）

前中宮はしめて内へいらせ給たりける夜雪のふり侍けれはつかはしける

宇治前太政大臣

雪つもるとしのしるしにいとゝしくちとせの松の花さくへそみる（336）」〈47丁オ〉

返し　六条右大臣

つもるへし雪つもるへし君か代は松の花さく千度みるまて（337）

天喜四年皇后宮の哥合に祝の心をよませ給へる　後冷泉院御製

長濱のまさこの数もなにならすつきせす見ゆる君か御代哉（338）

松上雪をよめる

源頼家

萬代のためしとみゆる松のうへに雪さへつもる年にもあるかな（339）

前斎宮伊勢におはしましける比いしなとりの名合といへることをせさせ給けるに祝の心をよめる　源俊頼　」〈47丁ウ〉

くもりなくとよさかのほる朝日には君そつかへんよろつ世までに（340）」〈48丁オ〉

金葉和歌集巻第六

別離部

兼房朝臣丹後になりて下ける日つかはしける　大納言経長

君うしや花の都の花をみて苗代水にいそくこゝろは（341）

返し　藤原兼房

よそにきく苗代水に哀わかおりたつ名をもなかしつる哉（342）

重尹帥のくたり侍けるに人に馬の餞し侍

けるときよめる　堀河右大臣
かへるへきたひのわかれとなくさむる心にたかふ涙なりけり（343）
題しらす　　よみ人しらす　　」〈48丁ウ〉
をくりゐてわか恋をれはしら雲のたなひく山をけふやこゆらん（344）
経輔卿つくしへくたり侍けるにくしてまかりけるとき上東門院に侍ける人のかりつかはしける
前大宰大貳長房
かた敷の袖にひとりはあかせともおつる涙そ夜をかさねける（345）
これを御覧してかたはらにかきつけさせ給ける　上東門院
わかれ路はけ（をイ）にいかはかり歎らん聞人さへそ袖はぬれける（346）
源公定か大隈守にてくたりける時月のあかゝりける夜わかれをおしみてよめる
源為成　　」〈49丁オ〉
はるかなる旅の空にもをくれねはうらやましきは秋のよの月（347）
對馬守小槻顕道かくたりけるときつかはしける
共政朝臣妻
おきつ嶋雲ゐの岸を行かへりふみかよはさむまほろしもかな（348）
俊頼か伊勢へまかる事ありてくたりけるとき人〳〵馬のはなむけし侍ける時よめる
参議師頼
伊勢の海をのゝふる江に朽はてゝ都のかたへかへれとそ思ふ（349）
源行宗
まちつけん我身なりせはかへるへきほとを幾度君にとはまし（350）
百首哥の中にわかれの心をよめる　」〈49丁ウ〉
中納言國信
けふはさは立わかるともたよりあらはありやなしやの情忘るな（351）
藤原基俊
烋きりの立わかれぬる君によりはれぬ思ひにまとひぬる哉（352）
為仲朝臣陸奥へまかりけるに人〳〵餞し侍けるによめる　藤原実綱朝臣

人はいさ我身はすゑに成ぬれは又あふさかもいかゝまつへき（353）

藤原有貞

こひしさはその人かすにあらすとも都をしのふうちにいれなん（354）

経平卿つくしへまかりけるにくしてまかりける日公実卿のもとへつかはしける　」〈50丁オ〉

中納言通俊

さしのほる朝日に君を思いてんかたふく月に我を忘るな（355）

返し　春宮大夫公実

※朝日とも月ともわかすつかのまも君をわするゝ時しなけれは（356）

陸奥へまかりけるときあふさかの関より都へつかはしける　橘則光

我ひとりいそくと思し東路にかきねの梅はさき立にけり（357）

」〈50丁ウ〉

〈白紙〉　」〈51丁オ〉

金葉和歌集巻第七

戀哥上

五月五日はしめて女のもとにつかはしける　小一条院

しらさりき袖のみぬれてあやめ草かゝる恋路におふる物とは（358）

女のかりつはしける　大江公資朝臣

しのすゝきうは葉にすかくさゝかにのいかさまにせは人なひきなん（359）

暁恋をよめる　神祇伯顕仲

さりともとおもふかきりはしのはれて鳥とゝもにそ音はなかれける（360）

つれなかりける女のもとにつかはしける　」〈51丁ウ〉

春宮大夫公実

これにしくおもひはなきを草枕旅にかへすはいなむしろとや（361）

顕季卿家にて人〳〵恋哥よみけるによめる　藤原顕輔

逢とみてうつゝのかひはなけれともはかなき夢そ命な

りける（362）

女のもとにつかはしける

源雅光

あふまてはおもひもよらす夏引のいとをしとたにいふときかはや（363）

従二位藤原親子家造紙合に恋の心をよめる

宣源法師

いまはたゝねられぬいほそともとする恋しき人のゆかりと思へは（364）　」〈52丁オ〉

大宰大貳長実

おもひやれすまのうらみてねたるよのかたしく袖にかゝる涙を（365）

物いひける女のかみをかいこしてみけるをみてよめる

津守國基

朝ねかみたか手枕にたはつけて今朝は形身とふりこしてみる（366）

題よみ人しらす

恋すてふ名をたになかせ涙川つれなき人もこひやわたると（367）

なにせむに思ひかけゝむから衣こひすることはみさほならぬに（368）

中納言雅定

あふことはいつとなきさの濱ちとり浪の立ゐに音をのみそ鳴（369）

ある宮はらに侍ける人のしのひて宮を出て物申てのち日ころありてつかはしける

春宮大夫公実

おもひいつやありしそのよの呉竹はあさましかりしふし所かな（370）

顕季卿家にて寄七夕恋といふ心をよめる

少将公教母

織女は又こむ秋もたのむらん逢夜もしらぬ身をいかにせん（371）

寄水鳥恋といへることをよめる

源師俊朝臣

水鳥の羽かせにさはくさゝ浪のあやしきまてもぬるゝ袖哉（372）

寄夢恋といへることをよめる

左兵衛督実能　」〈53丁オ〉

ゆめにたにあふとはみえよさもこそはうつゝにつらき心なりとも（373）

題しらす　中納言顕隆

しら雲のかゝる山路をふみゝてそいとゝ心は空に成ける（374）

中納言俊忠の家にてたのめてあはぬ恋

といへる心をよめる　源顕國朝臣

あひみんとたのむれはこそくれは鳥あやしやいかゝ立かへるへき（375）

忍恋の心をよめる　中納言実行

谷河の上は木の葉にうつもれてしたになかるゝ人しるらめや（376）

月前戀といへることをよめる

藤原基光

なかむれは恋しき人のこひしきにくもらはくもれ秋のよの月（377）

」〈53丁ウ〉

題しらす　よみ人しらす

つらしともおろかなるにそいはれけるいかにうらむと人にきかせん（378）

物申ける人の前中宮にまいりけれは名残

をこひて月のあかゝりけるよいひつかはしける

藤原知房

おもかけは数ならぬ身にこひられて雲ゐの月を誰とみるらん（379）

さはる事ありて久しくをとつれさりける女の

もとよりいひをくりて侍ける

よみ人しらす

あさましやなとかきたゆるもしほ草さこそはあまのすさひなりとも（380）

文はかりをこせていひたえにける人のもとにつかはしける　内大臣家小大進

」〈54丁オ〉

ふみそめて思かへりし紅の筆のすさひをいかてみせけん（381）

実行卿家哥合にこひの心をよめる

長実卿母

しるらめや淀のつき橋よとゝもにつれなき人をこひわたるとは（382）

藤原道経

こひわひてをさふる袖やなかれいつる涙の川のゐせきなるらん（383）

少將公教母

なかれての名にそ立ぬる涙川人めつゝみをせきしあへねは（384）

題しらす　皇后宮右衛門佐

涙川そてのゐせきも朽はてゝよとむかたなき恋もする哉（385）　」〈54丁ウ〉

源顕國朝臣

かくとたにまたいはしろのむすひ松むすほゝれたる我心かな（386）

女のもとにつかはしける　藤原顕輔朝臣

恋すてふもしの関守いくたひか我かきつらん心つくしに（387）

左兵衛督実能

命たにはかなからすは年ふとも逢みんことをまたまし物を（388）

後朝の心をよめる　源行宗朝臣

つらかりし心ならひにあひみてもなを夢かとそうたかはれける（389）

堀河院御時艶書合によめる

春宮大夫公実

おもひあまりいかてもらさむ奥山の岩かきこむる谷の下水（390）　」〈55丁オ〉

恋の心をよめる　藤原顕輔朝臣

年ふれと人もすさめぬ我恋や朽木のそまの谷の埋木（391）

あるましき人をおもひかけてよめる

よみ人しらす

いかにせむ数ならぬ身にしたかはてつゝむ袖よりおつる涙を（392）

院の熊野へまいらせ給たりけるとき御むかへにまいりて旅の床露かかりけれはよめる

大宰大貳長実

夜もすから草の枕にをく露は故郷こふるなみたなりけり（393）

野分のしたりけるにいかゝなとをとつれたりける人のそのゝち又をともせさりけれはつかはしける　」〈55丁ウ〉

相模

あらかりしかせのゝちよりたえぬるはくもてにすかく糸にや有らん（394）

國信卿家哥合によるの恋の心をよめる

源俊頼

よとゝもに玉散床のすか枕みせはや人に夜はのけしき

を（395）
五月五日わりなくていてたる所にこもといへる
物をひきたりしもわすれかたさにいひつかはし
ける　相模
あやめにもあらぬ真薦を引かけしかりのよとのゝ忘ら
れぬかな（396）
閏五月侍けるとし人をかたらひけるに後の
五月すきてなと申ければよめる　」〈56丁オ〉

橘季通
なそもかく恋路にたちてあやめ草あまりなかひく五月
なるらん（397）
人にかはりてつかはしける
神祇伯顕仲
をのつからよかるゝほとのさ莚はなみたのうきになる
としらすや（398）
そら事いひてひさしくをとせぬ人のもとに
いひつかはしける　相模
※ありふるもうき世也けりなかゝらぬ人の心をいのち
ともかな（399）
人をうらみてつかはしける
藤原惟規

池にすむ我名ををしのとりかへす物にもかなや人をう
らみし（400）　」〈56丁ウ〉
女のもとにまかりたりけるにこよひはかへりねと
申ければかへりにける後一夜はいかゝおもひし
なと申たりけれはいひつかはしける
藤原正家朝臣
秋かせに吹かへされてくすの葉のいかにうらみし物と
かはしる（401）
かたらひ侍ける人のあなかちに申さする事の
ありけれはいひつかはしける
藤原有教母
したかへは身をはすてゝき心にもかなはてとまる名こ
そおしけれ（402）
長実卿家哥合にこひの心をよめる
藤原忠隆 以名資基也　」〈57丁オ〉
つゝめとも涙の面のしるなれはこひする名をもふらし
つる哉（403）
人をうらみてつかはしける
藤原惟規

嶋かせにしはたつ浪の八千かへりうらみても猶たのまるゝ哉（404）

なき名たてたる人のもとへつかはしける

前斎宮内侍（永縁妹）

あさましやあふせもしらぬ名とり川またきにいはまもらすへしやは（405）

逢不逢戀の心をよめる

左京大夫経忠

一夜とはいつか契しかは竹のなかれてとこそおもひそめしか（406）

俊忠卿家にて恋哥十首人〳〵よませ侍

」〈57丁ウ〉

けるにちかひてあはすといへることをよめる

皇后宮式部

あひみての後つらからは世ゝを経てこれよりまさる恋にまとはん（407）

実行卿家哥合に恋の心をよめる

源俊頼朝臣

いつとなくこひにこかるゝ我身よりたつやあさまの煙なるらん（408）

恋哥とてよめる　藤原成通朝臣

後世と契し人もなき物をしなはやとのみいふそはかなき（409）

摂政左大臣

いはぬまはしたはふあしのねをしけみひまなき恋を君しるらめや（410）

かたらひける人のかれ〳〵になりてうらめしかりける

」〈58丁オ〉

つかはしける　白河女御越中

まちしよのふけしをなにゝ恨（歟イ）けんおもひたえても過しける身を（411）

恋の心をよみけるによめる

律師実源

命をしかけて契し中なれはたゆる〇（は）しぬるこゝちこそすれ（412）

皇后宮美濃

かきたえてほともへぬるをさゝかにのいまは心にかゝらすもかな（413）

旅宿戀を

摂政左大臣

見せはやな君しのひねの草枕玉ぬきかくる旅のけしきを（414）

堀川院御時艶書合によめる

皇后宮肥後　　」〈58丁ウ〉

おもひやれとはて日をふる五月雨にひとり宿もる袖のしつくを（415）

皇后宮にて文をかへさるゝ恋といへることを

よめる　　美濃

こふれとも人の心のとけぬにはむすはれなからかへる玉章（416）

人〳〵に恋の哥よませ侍けるに人にかはりて

摂政左大臣

心さしあさちか上にをく露の玉さかにとふ人はたのまし（417）

みか月によするこひをよめる

藤原為継

※よひのまにほのかに人をみか月のあかて入にし影そ恋しき（418）

忍恋をよめる　　よみ人しらす　　」〈59丁オ〉

しのふれとかひも渚のあまを舟浪のかけても今はうらみし（419）

雲居寺の哥合に人にかはりて

三宮大進

なそもかく身にかふはかりおもふらん逢みん事も人たのめかは（420）

寄花恋の心をよめる

摂政左大臣

あたなりし人の心にくらふれは花もときはの物にそ有ける（421）

百首哥の中に恋の心をよめる

修理大夫顕季

わかこひはからす羽にかくことのはのうつさぬほとはしる人もなし（422）

摂政左大臣家にて恋の心をよめる　　」〈59丁ウ〉

源雅光

あやにくにこかるゝむねもある物をいかにかはかぬたもとなるらん（423）

寄山恋といへる事をよめる

大中臣公長

こひ侘ておもひいるさの山のはにいつる月日のつもりぬる哉（424）

つれなかりける人にあふよしの夢をみてつかはしける　　藤原公教

うたゝねにあふと見つるをうつゝにてつらきを夢と思

はましかは（425）
　権中納言俊忠卿家にて恋哥十首人〳〵
　よみけるにくれともとまらすといふことをよめる
　　源俊頼朝臣　　」〈60丁オ〉
思草葉すゑにむすふしら露のたま〳〵きては手にもたまらす（426）
　女をうらみてつかはしける
　　春宮大夫公実
あしねはふ水のうへとそ思しをうきは我身に有ける物を（427）
　重服になりたる人のたちなからまうて
　こむと申たりけれはつかはしける
　　橘俊宗女
たちなからきたりとあはし藤衣ぬき捨られむ身そとおもへは（428）
　恋のこゝろを人にかはりてよめる
　　前中宮上総
石はしる瀧の水上はやくよりをとにきゝつゝ恋わたる哉（429）
　　」〈60丁ウ〉
皇后宮別當
たのめをくことの葉たにもなき物をなにゝかゝれる露のいのちそ（430）
　　」〈61丁オ〉
金葉和歌集巻第八
戀部下
　初恋の心をよめる
　　良暹法師
かすめてはおもふ心をしるやとて春の空にもまかせつる哉（431）
　公任卿家にて紅葉あまの橋立恋と三つの題を人〳〵よませ侍けるにをそくまかりて人〳〵みなかきけるほとに成にけれは三の題をひとつによめる哥
　　藤原範永朝臣
恋わたる人にみせはや松のはも下紅葉するあまの橋立（432）
　　」〈61丁ウ〉
　後朝恋の心をよめる
　　源師俊朝臣
しのゝめの明ゆく空もかへるには涙にくるゝ物にそ有ける（433）

月増恋といふことを　内大臣

いとゝしくおも影にたつこよひ哉月をみよとも契らさりしに（434）

恋の心をよめる　藤原顕輔朝臣

こひ侘てねぬ夜つもれはしきたへの枕さへこそうとく成けれ（435）

鳥羽殿哥合に恋の心をよめる　藤原仲実朝臣

よとゝもに袖のかはかぬ我恋やとしまか磯によするしら浪（436）

晩恋といへることをよめる　」〈62丁オ〉

中納言雅定

あふ事をこよひとおもはゝ夕つくひ入山のはもうれしからまし（437）

恋の心をよめる　右兵衛督伊通

山の井の岩もる水に影みれはあさましけにも成にける哉（438）

皇后宮にて人〳〵恋の哥つかうまつりける　大宰大貳長実

によめる

みちのくの思しのふにありなから心にかゝるあふの松原（439）

奈良の人〳〵百首哥よみけるに恨の心　権僧正永縁

をよめる

おもはんとたのめし人のむかしにもあらすなるとのうらめしきかな（440）

恋の哥とてよめる　」〈62丁ウ〉

隆源法師

くるゝまもさためなきよのあふことをいつともしらて恋わたる哉（441）

蔵人家時かれ〳〵に成けるをうらみていひ　前中宮越後

つかはしける

人心あさゝは水のねせりこそこるはかりにはつまゝほしけれ（442）

恋哥十首人〳〵よみけるにたちきゝて

こふといへることをよめる　修理大夫顕季

わきもこか聲たちきゝしから衣そのよの露に袖はぬれけり（443）

我をはかれ〳〵になりて人のかりまかるときゝて

つかはしける　よみ人しらす　」〈63丁オ〉

ことはりや思ひくらふの山桜にほひまされる花をめつ

るも（444）

郁芳門院の根合によめる　周防内侍

恋わひてなかむる空のうき雲やわかしたもえの煙なるらん（445）

前斎宮河内

あふ事のひさしにふけるあやめ草たゝかりそめの妻とこそみれ（446）

恋の心をよめる　大宰大貳長実

つらきをもおもひもしらぬ身のほとにこひしさいかに忘さるらん（447）

題しらす　前中宮上総

さきの世の契をしらてはかなくも人をつらしと思ひける哉（448）

恋哥よみける所にてよめる　源俊頼朝臣　」〈63丁ウ〉

忘草しけれるやとをきてみれは思のきよりおふるなりけり（449）

人をうらみて　讀人しらす

いまよりは思ひもいれしうらめしといふもたのみのかゝる限そ（450）

れいならすおほえけるとき人のかりつかはしける　よみ人しらす

あはすともなからむ世には思ひ出よ我ゆへ命たえし人そと（451）

逢不逢恋をよめる　左兵衛督実能

おもひきや逢みしよはのうれしさに後のつらさのまさるへしとは（452）

女のかりつかはしける　藤原永実　」〈64丁オ〉

する墨もおつる涙にあらはれて恋しとたにもえこそかゝれね（453）

家哥合に初恋の心をよめる　中納言國信

色みえぬ心はかりはしつむれと涙はえこそしのはさりけれ（454）

題よみ人しらす

あふ事は夢はかりにてやみにしをさこそみえんと人にかたるな（455）

大納言経信

あしかきにひまなくかゝるくものいの物むつかしくしける我こひ（456）

藤原忠隆

をさふれとあまる涙はもる山のなけきにおつるしつく也けり（457）

月をみてよめる　橘俊宗女　　」〈64丁ウ〉

いかにせむなけきのもりはしけゝれとこのまの月のかくれなきよを（458）

物申ける人のひさしくをともせさりけれは

つかはしける　前斎院肥前

あしふきのこやわすらるゝ妻ならむひさしく人の音信もせぬ（459）

恋の心をよめる　左兵衛督実能

我恋のおもふはかりの色に出はいはても人に見えまし物を（460）

もろともに郭公まちけるにさはる事ありて

いりにける後なきつやなと尋けるをきゝて

春宮大夫公実

郭公雲ゐのよそになりしかはわれそなこりの空になかれし（461）

冬恋といへることをよめる　　」〈65丁オ〉

藤原成通朝臣

水のおもにふるしら雪のをともなく消やしなまし人のつらさに（462）

多聞といへるわらわをよひにつかはしたりけるにみえさりけれは月のあかゝりける夜よめる

権僧正永縁

待人のおほ空わたる月ならはぬるゝ袂に影はみてまし（463）

水鳥によする恋を

摂政左大臣

あふこともなにはにあさる蘆鴨のうきねをなくと人はしらすや（464）

人をうらみてよめる　藤原盛経母

さのみやは我身のうきになしはてゝ人のつらさを恨さるへき（465）　　」〈65丁ウ〉

摂政左大臣家にて恋の心をよめる

源雅光

名にたてるあはてのうらのあまたにもみるめはかつく物とこそきけ（466）

うらめしき人のあるにつけてもむかしを思出らるゝ事ありてよめる

前斎宮甲斐

いま人の心を三輪の山にてそすきにしかたはおもひしらるゝ（467）
　わすれにし人のおもひいてゝをとつれたるに
　よめる　　前太政大臣家安藝
めつらしやいはまによとむ忘水いくかを過ておもひいつらん（468）
　山の哥合に恋の心をよめる　　」〈66丁オ〉
　よみ人しらす
玉さかにあふ夜は夢のこゝちして恋しもなとかうつゝなるらん（469）
　いかてもとおもふ人のさもあらぬさきにさそなんと人の申ければよめる
　中原章経
恋わふる君かあふてふことのはゝ偽さへそうれしかりける（470）
　伊賀少将かもとへつかはしける
　前中納言資仲
よもの海の浦〳〵ことにあされともあやしく見えぬいけるかひ哉（471）
　返し　　伊賀少將
玉さかに浪の立よるうら〳〵はなにのみるめのかひか有へき（472）　」〈66丁ウ〉
　物おもひ侍けるころ月のあかゝりける夜あかさりしおもかけつねよりもたへかたくてよめる
　橘俊宗女
※つれ〳〵と思そいつる見し人をあはていく月なかめしつらん（473）
　題しらす　　上総侍従
あさましく涙にうかふ我身かな心かろくはおもはさりしを（474）
　物へまかりける道にはしたものゝあひたりけるをとはせ侍けれは上東門院に侍すまひこそとなむ申といひけるをきゝてよめる
　源縁法師
名きくよりかねてもうつる心かないかにしてかはあふへかるらん（475）　」〈67丁オ〉
　恋の心をよめる　民部卿忠教
恋わひてたえぬ思の煙もやむなしき空の雲となるらん（476）
　女のもとへつかはしける
　大納言経信

逢ことはいつともなくて哀わかしらぬいのちにとしをふる哉（477）

ある所にて女房のなかきかみをうちいたしてみせけれはよめる　藤原顕綱朝臣

人しれすおもふ心をかなへ南かみあらはれてみえぬとならは（478）

堀河院御時艶書合つかまつりける　中納言俊忠

人しれぬ思ひありそのうら風に浪のよるこそいはまほしけれ（479）　」〈67丁ウ〉

返し　一条紀伊〈ママ〉

をとにきくたかしの浦のあた浪はかけしや袖のぬれもこそすれ（480）

暮にはかならすとたのめける人のはつかの月のいつるまてみえさりけれはよめる　摂政家堀川

契をく人（きしイ）もこすゑの木のまよりたのめぬ月の影そもりくる（481）

心かはりたる人のもとへつかはしける　江侍従

めのまへにかはる心を涙河なかれてもやとおもひける哉（482）

國信卿家哥合に初恋をよめる　源兼昌　」〈68丁オ〉

けふこそはいは瀬の杜の下紅葉色にいつれは散もしぬらん（483）

雪のあしたに出羽弁かもとよりかへりけるに　かれかもとよりをくりける　出羽弁

をくりてはかへれとそ思し玉しゐの雪さすらひて今朝はなき哉（484）

返し　大納言経信

冬のよの雪けの空に出しかと影より外に送やはせし（485）

すみかをしらせぬ恋といへる事をよめる　前斎院六条

ゆくゑなくかきこもるにそひきまゆのいとふ心のほとはしらるゝ（486）

よにあらむかきりはわすれしと契る人の久　」〈68丁ウ〉

しうをとつれさりけれはつかはしける

よみ人しらす

人はいさありもやすらむ忘られてとはれぬ身こそなき心ちすれ（487）

年ころ物申ける人のたえてをとつれさり

けれはつかはしける

はやくよりあさき心と見てしかは思たえにき山河の水（488）

題しらす

もらさはやほそ谷川の埋水かけたにみえぬ恋にしつむと（489）

おとこのけふは方違に物へまかるといはせて侍

けれは申つかはしける

君こそは一夜めくりの神ときけなにあふことのかたたかふらん（490）　」〈69丁オ〉

朝恋をよめる　藤原顕輔朝臣

あつさ弓かへるあしたの思には引くらふへき事のなき哉（491）

人のもとより袖のぬるゝさまをみせはやなと

申たりけれはよめる　皇后宮少将

うらむともみるめもあらし物ゆへになにかはあまの袖ぬらす覧（492）

旅宿恋といへることをよめる

修理大夫顕季

こひしさをいもしるらめや旅ねして山のしつくに袖ぬらすとは（493）

人のゆふかたまうてこむと申たりけれはよめる

一条紀伊〈ママ〉

うらむなよ影みえかたき夕月夜おほろけならぬ雲ま待身そ（494）　」〈69丁ウ〉

蔵人にて侍けるころ女のもとにまかりてよめる　藤原永実

三日月のおほろけならぬ恋しさにわれてそ出る雲の上より（495）

周防内侍したしくなりてゆめ〳〵もらすなと

申けれはよめる　源信宗朝臣

あはぬ夜はまとろむほとのあらはこそ夢にも見きと人にかたらめ（496）

題不知　左京大夫経忠

人しれすなき名はたてとから衣かさねて袖は猶そ露けき（497）

人をうらみてつかはしける

大中臣輔弘女

あちきなく過月日そうらめしき逢みしほとを隔とおもへは（498）　」〈70丁オ〉

三井寺にて人〳〵恋の哥よみけるに
よめる　僧正公圓
つらしとも思はむ人はおもは南我なれはこそ身をはうらむれ（499）
かたらひける女のもとにまからむとは申けれとさは
る事ありてまからさりけれは五月雨のころ
をくり侍ける　よみ人しらす
五月雨の空たのめのみひまなくて忘らるゝ名そ世にふりぬへき（500）
返し　左兵衛督実能
わすられむ名はよにふらし五月雨もいかてかしはしをやまさるへき（501）
題しらす　よみ人しらす
あま雲のかへしの風のをとせぬはおもはれしとの心なるへし（502）　」〈70丁ウ〉
足引の山のまに〳〵たふれたるから木はひとりふせるなりけり（503）
津のくにのまろやは人をあくたかは君こそつらきせゝはみえしか（504）
あふみてふ名はたかしまにきこゆれといつらはこゝにくりもとの里（505）
笠とりの山に世をふる身にしあれはすみやきもをる我心かな（506）
みくま野に駒のつまつく青つゝら君こそまろかほたし也けれ（507）
こりつむるなけきをいかにせよとてか君にあふこの一すちもなき（508）
あふこなき物とする〳〵なにゝかはなけきを山にこりはつむらん（509）
はかるめることのよきのみおほかれは空なけきをはこひにやあるらん（510）
逢ことをいまはかた見のめをあらみもりてなかれむ名こそおしけれ（511）
あふことはかたねふりたる磯ひたひひねふりふすともかひやなからん（512）
逢事のかたのにいまは成ぬれはおもふかりのみゆくにやあるらん（513）　」〈71丁オ〉
あふみにそありといふなるかれいひ山君はこえける人

とねくさし（514）
逢ことはなからふる屋の板しとみさすかにかけて年のへぬらん（515）
かしかまし山の下ゆくさゝれ水あなかまわれもおもふ心あり（516）
ぬす人といふもことはりさ夜中に君か心をとりにきたれは（517）
花うるしこやぬる人のなかりけるあなはらくろの君か心や（518）

寄石恋といへることをよめる　前斎院六条

あふことをとふ石神のつれなさに我心のみうこきぬる哉（519）

摂政左大臣家にて恋の心をよめる　源雅光

数ならぬ身を宇治川の橋はし〳〵と〈ママ〉いはれなからも恋わたる哉（520）　」〈71丁ウ〉

恋哥十首人〳〵よみけるによめる　修理大夫顕季

玉津嶋きしうつ浪の立かへりせないてましぬ名残こひしも（521）

恋哥とてよめる　春宮大夫公実

逢事は舟人よはみこく舟のみをさかのほる心ちこそすれ（522）

顕仲卿女

心からつきなき恋をせさりせはあはてやみにはまとはさらまし（523）

内大臣家小大進

かくはかり恋の病はをもけれとめにかけさけてあはぬ君哉（524）

摂政左大臣家にてとき〳〵あへりといふことをよめる　源顕国朝臣　」〈72丁オ〉

我こひはしつのしけ糸すちよはみたえまはおほく来るはすくなし（525）

恋の哥人〳〵よみけるによめる　源俊頼朝臣

あさましやこはなにことのさまそとよこひせよとてもむまれさりけり（526）　」〈72丁ウ〉

金葉和歌集巻第九

雑部上

むかし道方卿にくして筑紫にまかりて
安楽寺にまいりて見侍けるみきりの
梅のわか任にまいりてみれは木のすかたは
おなしさまにて花のをい木になりて所〳〵
さきたるをみてよめる　大納言経信

神かきにむかしわかみし梅の花ともに老木と成にける
哉（527）

山家鶯といへることを人〳〵によませ侍
けるついてに　摂政左大臣　」〈73丁オ〉

山さとも憂世中をはなれねは谷の鶯音をのみそなく
（528）

圓宗寺の花をみて後三条院の御
ことなとおほしいてゝよませ給へる
三宮

うへ置し君もなき世に年へたる花は我身の心ちこそす
れ（529）

花見の御幸をみていもうとの内侍の
もとへつかはしける　権僧正永縁

ゆくすゑのためしとけふを思ふともいま幾たひか人に
かたらん（530）

返し　内侍

幾ち代も君そかたらむつもりゐておもしろかりし花の
御幸を（531）

大嶺にて思かけす桜の花さきたるをみて
」〈73丁ウ〉

よめる　僧正行尊

もろともにあはれとおもへ山桜花よりほかにしる人も
なし（532）

堀河院御時殿上の人〳〵あまたくして
花見けるに仁和寺に行宗朝臣ありと
きゝて檀紙やあるとたつねて侍けれはつかは
すとて上にかきつけてはへりける
源行宗朝臣

いくとせに我成ぬらんもろ人の花みる春をよそにきゝ
つゝ（533）

山さとに人〳〵まかりて花の哥よみける
によめる　源定信

みる人はよしのゝ山のさくら花をりしらぬ身や谷の埋
木（534）　」〈74丁オ〉

後三条院かくれおはしまして後又の
とし春さかりなる花をみてよめる
右〈ママ〉近将曹秦兼方
去年みしに色もかはらすさきにけり花こそ物は思はさりけれ（535）
つかさめしのころよろつにうらやましき事のみ
きこえけれはよめる　藤原顕仲朝臣
としふれと春にしられぬ埋木は花の宮こにすむかひそなき（536）
蔵人をりて臨時祭の陪従し侍けるに
右中弁伊家かもとにつかはしける
藤原惟信朝臣
款冬もおなしかさしの花なれと雲ゐの桜猶そこひしき（537）」〈74丁ウ〉
隆家卿大宰帥にふたゝひ成て後のたひ
に香椎御社にまいりたりけるに神主
ことのもとゝすきの葉を折て帥のかふり
にさすとてよめる　神主大膳武忠
千はやふる香椎の宮の枕のはをふたゝひかさす我君そ
君（538）
源心天台座主になりてはしめて山にのほり
けるにやすみける所にて哥よめとせめけ
れはよめる　良暹法師
としを経てかよふ山路はかはらねとけふはさかゆく心
ちこそすれ（539）
藤原基清か蔵人おりて又の日つかはし
ける　藤原家綱　」〈75丁オ〉
おもひかね今朝は空をやなかむらん雲の通路霞へた
てゝ（540）
一品宮天王寺にまいらせ給て日来御念仏
せさせ給けるに御ともの人〳〵住よしにま
いりて哥よみけるによめる
源俊頼朝臣
いくかへり花さきぬらん住よしの松も神代の物とこそ
きけ（541）
田家老翁といへることをよめる
中納言基長
ますらおは山田の庵に老にけりいま幾秋にあはんとす
らん（542）
仁和寺にすませ給けるころいつまてなと
都より人のたつね申たりけれはよませ」〈75丁ウ〉

給ける　三宮

かくしても〈ママ〉えそすむましき山里のほそ谷川の心ほそさに（543）

笙のいはやにてよめる　僧正行尊

草庵なに露けしと思釵〈ケンと読ませるか〉もらぬ岩やも袖はぬれけり（544）

良暹法師うらむる事ありけるころむつきのついたちにまうてきて又ひさしくみえさりけれはつかはしける　律師慶範

春のこしその日つらは解にしを又なに事にとゝこほるらん（545）

對山待月といへることをよめる　藤原正季　」〈76丁オ〉

この世には山のはいつる月をのみ待ことにてもやみぬへき哉（546）

山里にてあり明の月みてよめる　僧正行尊

木のまもるかたわれ月のほのかにもたれか我身に〈ママ〉思出へき（547）

宇治前太政大臣時の哥よみともに月の哥よませ侍けるにもれにけれは公実卿のもとにをくりて侍ける　源師光

かすか山嶺つゝきてる月影にしられぬ谷の松もありけり（548）

僧都頼基光明山にこもりぬときゝてつかはしける　橘能元

うらやましうき世を出ていかはかりくまなき峯の月をみるらん（549）　」〈76丁ウ〉

返し　僧都頼基

もろともに西へやゆくと月影のくまなき峯を尋てそみし（550）

郁芳門院伊勢におはしましけるころあからさまにくたりけるにすゝか河をわたりける時よめる　六条右大臣北方

はやくよりたのみわたりしすゝか川思ことなる音そ聞ゆる（551）

源仲正かむすめ皇后宮にはしめてまいりたりけるに箏ひくときかせ給てひかせさせ給けれはつゝましなからひきならしけるをきゝて口すさむやうにいひかけゝる　摂津　」〈77丁オ〉

ことの音や松ふく風にかよふらんちよのためしに引つへきかな（552）

返し　美濃

うれしくも秋のみ山の松風にうゐことの音のかよひける哉（553）

月のあかゝりける夜ことひくをきゝてよめる　内大臣家越後

ことの音は月の影にもかよへはや空にしらへのすみのほるらん（554）

いせの國のふた見のうらにてよめる　大中臣輔弘

玉くしけふた見の浦のかいしけみまき絵にみゆる松の村立（555）

宇治前太政大臣布引瀧見にまかりたりけるともにまかりてよめる　大納言経信

しら雲とよそに見つれは足引の山もとゝろにおつる瀧つ瀬（556）

讀人不知

あまの河これやなかれのすゑならむ空よりおつる布引の瀧（557）

選子内親王いつきにをはしましける時に女房に物申さむとてしのひてまいりたりけるにさふらひいかなる人そとあらくましけにとはせけれはたゝうかみにかきてさふらひにをかせ侍ける　藤原惟規

神かきは木のまろ殿にあらねともなのりをせねは人とかめけり（558）

郁芳門院伊勢にをはしましける時六条」〈78丁オ〉

右大臣北方あからさまにくたり侍けるとき思かけすかねのこゑのほのかにきこえけれはよめる　六条右大臣北方

神かきのあたりとおもふにゆふたすき思ひもかけぬ鐘の音哉（559）

前斎宮伊勢にをはしましける比寮頭保俊

御まつりのほととのゐ物のれうにきぬかりてほとすきてこれをわすれていまゝてかへさゝりける事なと申たりける返事にいひつかはしける　前斎宮内侍（永縁妹）

かへさしとかねてしりにきから衣こひしかるへき我身ならねは（560）

和泉式部保昌に具して丹波國に侍ける」〈78丁ウ〉

ころ宮こに哥合のありけれは小式卩内侍
哥よみにとられて侍けるを中納言局のかた
にまうてきて哥はいかゝせさせ給丹波へは人つ
かはしてけむや使またまうてこすやいかに
心もとなくおほすらむなとたわふれけるをひき
とゝめてよめる　小式部内侍
おほえ山いくのゝ道の遠けれはまたふみもみすあまの
橋立（561）
百首哥の中にゆめの心をよめる
修理大夫顕季
うたゝねの夢なかりせは別にしむかしの人を又見まし
やは（562）
百首哥の中にたひの心をよめる　」〈79丁オ〉
参議師頼
さ夜中におもへはかなし陸奥のあさかのぬまに旅ねし
てけり（563）
この集撰侍けるとき哥こはれてをくるとて
よめる　藤原顕輔朝臣
家のかせふかぬ物ゆへはつかしのもりのことの葉ちら
しはてぬる（564）
しほゆあみに西の海のかたへまかりたりける
にみるといふ物を身つからつみて宮こにあるむす
めのもとにつかはしける　平康貞女
いそなつむ入江の浪の立かへり君みるまての命ともか
な（565）
返し　むすめ
なかゐするあまのしわさとみるからに袖のうらにもみ
つ涙かな（566）　」〈79丁ウ〉
和泉式卩石山にまいりけるに大津にとま
りて夜ふけてきゝけれは人の気はひあまた
してのゝしりけるたつねけれはあやしの
山かつのよねしらけ侍なりと申けれ
は猶きゝてよめる　和泉式部
さきのゐる松原いかにとよむらんしらけはしたてさ
とゝよみけり（567）
公実卿のもとにまかりたりけるに侍らさりけれ
は出ゐにをきたりける小弓とりてさふらひに
これはおろしつとふれていてにけりかの卿かへ
りて弓をたつねけるに時房まうてきて
とつる〈ママ〉と申けれはおとろきてこれは院の
」〈80丁オ〉

御弓そとくかへしをこせよといひつかはし
たりけれは御弓につけてつかはしける
藤原時房
あつさ弓さこそはそりのたかゝらめはるほともなくか
へるへしやは（568）
おとこかれ〳〵になりてほとへてたかひに忘て
後人にしたしく成にけるなと申と聞てな
けきける人にかはりて
春宮大夫公実
なき名にそ人のつらさはしられける忘られしには身を
そうらむる（569）
大貳資通しのひて物申けるをほとも
なくさうなと人の申ければよめる　」〈80丁ウ〉
相模
いかにせむ山田にかこふかきしはのしはしのまたにか
くれなき身を（570）
肥後内侍おとこにわすられてなけくを
御らむしてよませ給ける
堀川院御製
わすられてなけく袂をみるからにさもあらぬ袖のそほ
ちぬる哉（571）

水車をみてよめる
僧正行尊
はやき瀬にたえぬはかりそ水車我もうき世にめくると
をしれ（572）
れいならぬ事ありてわつらひける比上東門
院に甘子たてまつるとて人にかゝせて」〈81丁オ〉
たてまつりける　堀河右大臣
つかへつるこの身のほとをかそふれはあはれこすゑに
成にける哉（573）
御返し　上東門院
すきゝつる月日のほともしられつゝこの身をみるも哀
なる哉（574）
僧正行尊まうてきてよるとまりて
つとめてかへりけるにとこをわすれたりける
を返しつかはすとてよめる
大納言経信　宗通ィ
草枕さこそはたひのとこならめけさしもをきてかへる
へしやは（575）
おとこ心かはりてまうてこすなりにける後
をきたりけるゑふくろをとりにをこせたりけ
」〈81丁ウ〉

れはかきつけてつかはしける
桜井尼
のきはうつましろのたかのゑ袋にをきゑをさゝてかへしつる哉（576）
後冷泉院御時近江國よりしろきからすを
たてまつりたりけるをかくして人にもみせさせ給はさりけれは女房たちゆかしかりけれはをの〳〵哥よみてたてまつれさてよくよみた
らむ人にみせんとおほせ事ありけれはつか
まつれる　少將内侍
たくひなく世におもしろき鳥ならはゆかしからすと誰か思はむ（577）
甲斐国よりのほりてをはなる人のもとに
」〈82丁オ〉
ありけるかはかなき事にてそのをはかな有そ
とてをひいたしけれはよめる
よみ人しらす
鳥の子のまたかひなからあらませはをはといふ物はをひいてさらまし（578）
百首哥の中に山さとをよめる
修理大夫顕季
ひくらしの聲はかりする柴のとは入日のさすにまかせてそみる（579）
題しらす　藤原仲実朝臣
としふれはわかいたゝきにをく露を草のうへともおもひけるかな（580）
殿上おりて侍ける比人の殿上しけるをみて
よめる　源行宗朝臣　」〈82丁ウ〉
うらやまし雲のかけはし立かへりふたゝひのほる道をしらはや（581）
殿上申けるにせさりけれはよめる
平忠盛朝臣
思ひきや雲ゐの月をよそにみて心のやみにまとふへしとは（582）
かたらひ侍ける人のかれ〳〵に成けれはこと人に
つきてつくしのかたへまかりなむとしけるを
きゝておとこのもとよりまかるましきよし
を申しけれはいひつかはしける
内大臣家小大進
身のうさもとふひともしにせかれつゝ心つくしの道はとまりぬ（583）
おとこのなかりける夜こと人をつほねに入たりけ

る　」〈83丁オ〉

にもとのおとこまうてきあひたりけれは
さはきてかたはらのつほねのかへのくつれより
にかしやりて又の日そのにかしたるつほねのぬし
の
かりゆふへのかへこそうれしかりしかといひつか
はしたりけれはよめる
よみ人しらす
ねぬる夜のかへさはかしくみえしかとわかちかふれは
事なかりけり（584）
源頼家か物申ける人の五節にいてゝ侍
けるをきゝてまことにやあまたかさねしをみ衣
とよのあかりのかくれなきよにとよみてつかはし
たりけれはかへしによめる　」〈83丁ウ〉

源光綱母
日影にはなき名立けりをみころもきて見よとこそいふ
へかりけれ（585）
経信卿にくしてつくしに侍ける肥後守盛房
野釵のあるみせむと申てほとへにけれはいかにな
と
たつねられてわすれたるよしを申しけれはよめる
源俊頼朝臣
なきかけにかけゝるたちもある物をさやつかのまに忘
はてける（586）
大峯の神仙といへる所にひさしう侍けれ
は同行みなかきりありてまかりけれは心ほそ
さによめる　僧正行尊
見し人はひとり我身にそはねともをくれぬ物は涙なり
けり（587）　」〈84丁オ〉

たゝならぬ人のもてかくして有けるにこを
うみてけるかもとよりうみたるむめををこせ
たれはよめる　よみ人しらす
葉かくれにつはるとみえしほともなくこはうみ梅に成
にける哉（588）
堀川院御時中宮の女房達亮仲実
紀伊守にて侍けるとき和哥の浦みむとて
さそひけれはあまたまかりけるにまからてつか
はしける
前中宮甲斐
人なみに心はかりは立そひてさそはぬわかのうらみを
そする（589）

保実卿のほかにうつりてのちかのもとの所に　」〈84丁ウ〉

てつねに申けるをきゝてよめる
藤原実信母
ことはりやくもれはこそはます鏡うつりし影もみえす成らめ（590）

月の入をみてよめる
源師賢朝臣
にしへゆく心は我もある物をひとりないりそ秋のよの月（591）

橘為仲朝臣みちの國のかみに成て侍ける時延任しつときゝてつかはしける
藤原隆資
まつわれはあはれ八十に成ぬるをあふくま川の遠さかりぬる（592）

したしき人の春日にまいりてしかのあり　」〈85丁オ〉

つるよしなむと申けるをきゝてよめる
藤原実光朝臣
三笠山神のしるしのいちしるく鹿ありけると聞そうれしき（593）

屏風の繪にしかすかのわたりゆく人立わつらふかたかける所をよめる
藤原実経朝臣
ゆく人も立そわつらふしかすかのわたりや旅のとまりなるらん（594）

題よみ人不知
身のうさを思しとけは冬のよもとゝこほらぬは涙なりけり（595）

上陽人苦最多少苦老亦苦といへる心をよめる
源雅光　」〈85丁ウ〉
むかしにもあらぬすかたに成ゆけと歎のみこそおもかはりせね（596）

青黛書眉く細長といへる事をよめる
源俊頼朝臣
さりともとかくまゆすみのいたつらに心ほそくも思け（をにイ）るかな（597）

年ひさしく修行しありきて熊野にて
験くらへしけるを祐家卿まいりあふてみけるに
ことのほかにやせおとろへてすかたもあやしけに
やつしたりけれは見わすれてかたはらなる僧に

いかなる人そことのほかにしるしありけなる人かな
と申けるをきゝてよめる　　僧正行尊　　」〈86丁オ〉
心こそ世をは捨しかまほろしのすかたも人に忘れにけり（598）
大中臣のすけひろ祭主もあかさりける
ころ祭主になさせ給へなむと大神宮に
申こひてねいりたりけるよの夢に枕かみ
にしらぬ人のたちてよみける哥
草の葉のなひくもまたす露の身の置所なく歎比かな（599）
六条右大臣六条家つくりていつみなと
ほりて〇わたりていつみなとよめと申たりけ
れは　　顕雅卿母
ち年まてすまむいつみの底によも影をならへむと思しもせし（600）
宇治平等院寺の寺主になりて宇治に　」〈86丁ウ〉
すみつきて比良の山のかたをなかめやりて
よめる　　忠快法師
宇治川の底のみくつと成なから猶雲かゝる山そこひしき（601）
家を人にはなちてたつとて柱に書つけ
侍ける　　周防内侍
すみわひて我さへ軒のしのふ草しのふかた〳〵しけきやと哉（602）
賀茂のなりすけにはしめてあひて物申
けるつゐてにかはらけとりてよめる
　　津守國基
きゝわたるみたらし川の水清みそこの心もけふそみるへき（603）
返し　　賀茂成助　　」〈87丁オ〉
※すみよしのまつかひありてけふよりはなにはのことも
しらすはかりそ（604）
皇后宮弘徽殿にをはしましけるころ俊
頼西面の細殿にてたちなから人に物申ける
に夜ふけゆくまゝにくるしかりけれはつちに
ゐたりけるをみてたゝみをしかせはやと女の申け
れは
たゝみはいしたゝみしかれて侍めれと申をきゝて
よ

める　　皇后宮大貳

いしたゝみありける物庭イを君に又しく物なしとおもひけるかな（605）

大原の行蓮ひしりのもとへ小袖つかはすとて

よめる　　天台座主仁覚

あはれはむとおもふ心はひろけれとはくゝむそてのせはくも有哉（606）　」〈87丁ウ〉

百首哥の中に述懐の心をよめる

源俊頼朝臣

世中はうき身にそへるかけなれや思すつれとはなれさるらむ（607）

おとこにつきて越前國にまかりたりけるに

おとこ心かはりてつねにはしたなけれは宮こなるをやのもとへいひつかはしける

よみ人しらす

うちたのむ人の心はあらち山こし路くやしき旅にもある哉（608）

返し　　をや

おもひやる心さへこそかなしけれあらちの山の冬のけしきは（609）

おもふこと侍ける比よめる　　」〈88丁オ〉

参議師時師頼イ

いたつらにすくる月日をかそふれはむかしを忍音そなかれける（610）

かゝみをみるに影のかはりゆくをみてよめる

源師賢朝臣

かはりゆく鏡の影をみるたひにおいその杜のなけきをそする（611）

前太政大臣の家に侍ける女を中将忠宗と

少将顕國とともにかたらひ侍けるか忠宗にあひにけりそのゝちほともなくわすられにけりときゝて女

のかりいひつかはしける

源顕国朝臣

こゆるきのいそきてあひしほ（かいイ）ともなく浪よりこすと聞はまことか（612）　」〈88丁ウ〉

蔵人親隆かうふり給はりて又の日つかはしける

藤原公教

雲の上になれにし物をあしたつのあふことかたにおりゐぬる哉（613）

堀川院の御時源俊重式卩丞申ける申文

にそへて頭弁重資かもとへつかはしける

源俊頼朝臣
日の光あまねき空のけしきにも我身ひとつは雲かくれつゝ（614）
これを奏しけれは周防内侍をめしてこれか返しせよと宣旨ありけれはつかまつれる
周防内侍
なにかおもふ春の嵐に雲はれてさやけきかけは君のみそみむ（615）
」〈89丁オ〉

〈白紙〉
」〈89丁ウ〉

金葉和歌集巻第十
雑部下
公実卿かくれ侍りて後かの家にまかりたりけるに梅さかりにさけるをみて枝にむすひつけて
侍ける哥　藤原基俊
むかしみしあるしかほにて梅かえの花たに我に物かたりせよ（616）
返し　中納言実行
ねにかへる花のすかたの恋しくはたゝこのもとを形見にはみよ（617）
人〳〵あまた具して花見ありきてかへりて後風おこりてふしたりけるに花みに具してはな見ける人のもとよりなに事かとたつねて侍
」〈90丁オ〉
けれはいひつかはしける
平基綱
桜ゆへいとひし風の身にしみて花よりさきに散ぬへきかな（618）
後三条院かくれさせをはしましての五月五日に一品宮の御帳に昌蒲〈ママ〉ふかせ侍けるに桜のつくりはなのさゝれたりけるをみてよめる
藤原有佐朝臣
※あやめ草ねをのみかくる世中におりたかへたる花さくらかな（619）
北方うせ侍りて後天王寺にまいりけるみちにてよめる　六条右大臣
なにはえのあしのわかねのしけゝれは心もゆかぬ舟出をそする（620）
」〈90丁ウ〉
郁芳門院かくれをはしまして又のとしの秋知信かりつかはしける　康資王母

うかりしに秋はつきぬと思しをことしもむしのねこそなかるれ（621）

下らうにこえられてよめる　源俊頼朝臣

せきもあへぬ涙のかはゝはやけれと身のうき草はなかれさりけり（622）

律師実源かもとに女房の佛供養せむとてよはせ侍ければまかりてみれはかなはすけなるけしきにみえけれはかたのことくいそき供養して立かへるほとにすたれの中より女房の手つからきぬ一とまきゑのてはことをゝしいたしたりけ」〈91丁オ〉

れは従僧してとらせてかへりてみれはしろかねのはこのうちにかきていれたりける哥　よみ人しらす

玉くしけかけこにちりもすへさりしふたおやなからなき身とをしれ（623）

大路に子をすてゝ侍けるをしくゝみにかきつけて侍りける哥

身にまさる物なかりけりみとり子はやらむかたなくかなしけれとも（624）

あはのかみ知綱にをくれて侍けるころなかされたりける人のゆるされてかへりたりけるをきゝてよめる　藤原知綱母

なかれてもあふせありけり涙川きえにしあはをなにゝたとへん（625）」〈91丁ウ〉

こゝ地れいならぬころ人のもとよりいかゝなと申たりけるによめる　讀人不知

呉竹のふししつみぬる露の身もとふことのはにおきそぬらるゝ（626）

範永朝臣出家しぬときゝて能登守にて侍けるころ國よりいひつかはしける　藤原通宗朝臣

よそなからよをそむきぬときくからにこし路の空はうち時雨つゝ（627）

律師実源かくれて後はゝのそのあつかひをしてまとろみたる夢にみえける哥

たらちめのなけきをつみてわれかゝく思の下になるそかなしき（628）

顕仲卿女にをくれてなけき侍ける比」〈92丁オ〉

ほとへてとひにつかはすとてよめる

大蔵卿匡房

その夢をとはゝ歎やまさるとておとろかさても過にけるかな（629）

従二位〈ママ〉藤原賢子れいならぬことありてよろつ心ほそくおほえけるに人のもとよりいかゝなとゝひて侍ければよめる　藤原賢子

いにしへは月をのみこそなかめしかいまは日をまつ我身也けり（630）

身まかりて後ひさしく成にけるはゝを夢にみてよめる　権僧正永縁

夢にのみむかしの人をあひみれはさむるほとこそわかれなりけれ（631）

人のむすめのはゝのもとへまかりたりけるほとに

」〈92丁ウ〉

をもきやまひをしてかくれなんとしけるときかきをきてまかりにける哥　よみ人しらす

露の身の消もはてなは夏草のはゝいかにしてあらむとすらん（632）

小式部内侍うせて後上東門院よりとしころ給はりけるきぬをなきあとにもつかはしたりけるに小式口内侍とかきつけられたりけるを　みてよめる　和泉式部

もろともに苔のしたには朽すしてうつもれぬ名をみるそかなしき（633）

したしき人にをくれてわさの事はてゝかへり侍けるによめる

」〈93丁オ〉

平忠盛朝臣

いまそしる思のはては世中のうき雲にのみましる物とは（634）

陽明門院かくれさせをはしまして後御わさのことはてゝ又の日雲のたなひきけるをみてよめる　藤原資信

さためなき世を浮雲そ哀なるたのみし君か煙とおもへは（635）

白河女御かくれ給て後かの家の南おもての藤の花さかりにさけるをみてよめる　僧正行尊

草木まて思けりともみゆる哉松さへ藤のころもきてけり（636）

兼房朝臣重服になりてこもりゐて侍　」〈93丁ウ〉

けるに出羽弁かもとよりとふらひたりける
をこれか返せよと申ければよめる
橘元任
かなしさのそのゆふ暮のまゝならはありへて人にとは
れましやは（637）

範國朝臣に具して伊予國にまかりたりける
に正月より三四月まて雨のふらさりけれは
祈さはきけれとかなはさりけれは哥よみて
一宮にまいらせて雨いのれと申けれはまいり
ていのり申ける哥
能因法師
あまのかは苗代水にせきくたせ天下ます神ならは神
（638）　」〈94丁オ〉

神感ありて三日三夜大雨ふりてやますと家
集に見えたり
心経供養してその心を人〳〵によませ侍
けるに　摂政左大臣
色も香もむなしととける法なれと祈しるしはありとこ
そきけ（639）

法文のありけるをさとなる女房のもとより宮
に申さすともしのひてあからさまとりてなと申
たりけるをほのきゝてよませ給ける
三宮
見しまゝに我はさとりをえてしかはしらせてとるとし
らさらめやは（640）

月のあかゝりける夜膽西聖人のもとへつかはし
」〈94丁ウ〉

ける　僧正行尊
いさきよき空のけしきを頼かなわれまとはする秋のよ
の月（641）

実範上聖人山寺にこもりぬときゝてつかはし
ける
静嚴法師
心にはいとひはてつとおもふらんあはれいつこもおな
しうき世を（642）

八月はかりに月あかゝりける夜阿弥陀のひしりの
とをりけるをよひよせさせてさとなる女房の
もとへいひつかはしける
選子内親王
あみた仏ととなふる聲に夢覚て西へなかるゝ月をこそ

みれ（643）　　」〈95丁オ〉

題しらす　　皇后宮肥後

をしへをきて入にし月のなかりせはいかて心を西にかけまし（644）

清海聖人の後生をなをそりおもひてねふり

たりけるに枕かみに僧のたちてよみかけ

ける哥

かくはかりこち吹風のふくをみてちりのうたかひおこさすもかな（645）

普賢十願文に願我臨欲命終時といへる

文をよめる　　覺樹法師

命をも罪をも露にたとへけり消はともにやきえむとすらん（646）

弟子品の心をよめる

僧正静圓　　」〈95丁ウ〉

吹かへす鷲の山かせなかりせは衣のうらの玉をみましや（647）

提婆品の心をよめる

膽西上人

法のためになふ薪にことよせてやかてうきよをこりそはてぬる（648）

皇后宮権大夫師時

けふそみる鷲のたかねにてる月を谷川くみし人のかけとは（649）

龍女成佛をよめる

勝超法師

※わたつ海のそこのみくつと見し物をいかてか空の月となるらむ（650）

涌出品の心をよめる

権僧正永縁　　」〈96丁オ〉

たらちねは黒かみなからいかなれはこのまゆしろきいとゝなるらん（651）

不軽品の心をよめる

あひかたき法をひろめし聖にそうちみし人もみちひかれける（652）

薬王品の心をよめる

懐尋法師

うき世をしわたすときけはあまを舟法に心をかけぬ日そなき（653）

人のもとにて経供養しけるに五百弟子

品の心をとけるに繋寶珠の事のたう

とかりけるよしをみてかつけ物にむすひつけて侍けるを見て返によみ侍ける

権僧正永縁　」〈96丁ウ〉

いかにして衣の玉をしりぬらんおもひもかけぬ人もある世に（654）

依他のやつのたとひを人〳〵よみけるに

この身かけろふのことしといへることをよめる

懐尋法師

いつをいつと思ひたゆみてかけろふのかけろふほとのよを過すらん（655）

常住心月輪といへることをよめる

澄成法師

よとともに心のうちにすむ月をあるとしるこそはかなかりけれ（656）

醍醐の釋迦會に花のちるをみてよめる

珍海法師母

けふも猶をしみやせまし法のためちらす花そと思なすは（657）

地獄繪につるきのえたに人のつらぬかれたるをよめる

和泉式部

あさましやつるきの枝のたはむまてこは何の身のなれるなるらん（658）

人のもとに侍けるにはかにたえ入てうせ南としけれはしとみのもとにかき入ておほちにをきたりけるに露のあしたにさはりける時鳥なくをきゝていきのしたによめる

田口重之女〈ママ〉

草の葉にかとてはしたり郭公しての山路もかくや露けき（659）

かくてつゐにおちいらむとてよめる

たゆみなく心をかくる弥陀佛人やりならぬちかひたかふな（660）　」〈97丁ウ〉

障子の絵に天王寺の西門に法師の舟にのりて西さまにはるかにこきはなれていくかたかける所をよめる

源俊頼朝臣

阿弥陀佛とゝなふる聲をかちにてやくるしき海を漕はなるらん（661）

連哥

ゐたりける所の北のかたにこゑなまりたる人の物いひけるをきゝて

永成法師
あつまうとのこゑこそ北にきこゆなれ
律師慶範　」〈98丁オ〉

みちの國よりこしにやあるらむ（662）
桃薗の桃花をみて
頼慶法師
桃そのゝもゝの花こそさきにけれ
公資朝臣
むめ津の梅はちりやしぬらん（663）
賀茂社にて物つくをとのしけるをきゝて
神主成助
しめのうちにきねのをとこそきこゆなれ
行里〈ママ〉
いかなる神のつくにかあるらむ（664）　」〈98丁ウ〉

宇治にて田の中におひたるおとこのふし
たりけるをみて
僧正深覚
春の田にすき入ぬへきをきなかな
宇治入道太政大臣
かのみなくちに水をいれはや（665）

日のいるをみて　観暹法師
日のいるは紅にこそにたりけれ
平為成
あかねさすともおもひけるかな（666）
かはらやをみて　」〈99丁オ〉

よみ人しらす
かはらやのいたふきにてもみゆるかな
助俊
つちくれしてやつくりそめけむ（667）
つくしの鹿嶋をみて
為助
つれなくたてるしかのしまかな
國忠
弓はりの月のいるにもおとろかて（668）
宇治へまかりけるみちに日ころ雨の
ふりけれは水の出てかも河をおとこの」〈99丁ウ〉

はかまをぬきて手にさけてわたりけるを
見て
源頼綱朝臣
かも河をつるはきにてもわたるかな
藤原信綱

かりはかまをはおしとおもひて（669）
　あゆをみて　　よみ人しらす
なにゝあゆるをあゆといふらむ
　　匡房卿妹
鵜舟にはとりいれし物をおほつかな（670）
　和泉式部賀茂にまいりけるにわら
　うつにあしをくはれて紙をまきたるをみて
　　」〈100丁オ〉

よめる　　神主忠頼
ちはやふる神をはあしにまくものか
　　式部
これをそしものやしろとはいふ（671）
　源頼光か但馬守にてありけるとき舘の
　前にけた河といふ河のあるより舟のく
　たりけるをしとみあくるさふらひしてと
　はせけれはたてと申ものかりてまかると
　いふをきゝて
　　源頼光
たてかるふねのすくるなりけり　　」〈100丁ウ〉

相模母

朝またきからろのをとのきこゆるは（672）
　すまひ草といへる草のおほかりけるをひ
　きすく〈ママ〉させけるをみて
　　よみ人しらす
ひくにはつよきすまひ草かな
とるてにははかなくうつる花なれと（673）
　鳥を軒にさしたりけるかよこ雨にぬれ
　てありけるをみて
　雨ふれは雉もしとゝに成にけり
かさゝきならはかゝらましやは（674）　　」〈101丁オ〉

　鵜の水にうかへるをみて
　　頼慶法師〈ママ〉
※あらうと見れとくろき鳥かな
　　よみ人しらす
さもこそはすみのえならめよとゝもに（675）
　　成光
おくなるをもやはしらとはいふ
　　観暹法師
見わたせはうちにも戸をはたてゝけり（676）
　みのむしの梅の花さきたるえたに
　あるを見て
　　」〈101丁ウ〉

律師慶暹

むめの花かさきたるみのむし
　まへなるわらは
雨よりは風ふくなとやおもふらむ（677）
　たきのこゑよるまさりてきこゆるを聞
　て　　よみ人しらす
よるをとす也たきのしら糸
くり返しひるもわくとは見ゆれとも（678）
　田中に馬のたてるをみて
　　永源法師
※田にはむ駒はくろにそありける　　」〈102丁オ〉

　　永成法師
※苗代の水にはかけとみえつるに（679）
　七十になるまてつかさもなくよろつ
　にあやしき事をおもひつゝけてよめる
　　源俊頼朝臣
七十にみちぬるとしのはまひさきひさしく
　もよにむもれ
　ぬる哉（680）
　」〈102丁ウ〉

〈白紙〉　」〈103丁オ〉

〈白紙〉　」〈103丁ウ〉